

### 第3章 イヌ利用について

イヌは人間との関わりがもっとも深い動物の一つである。これは、群居性と社会性の強さという人間に似た社会構造を持つイヌが、比較的早い段階で人間と共生し、両者の間に強固な主従関係が結ばれたことによるものと思われる。両者の深い関わりは、イヌの形質的特徴における多様性に窺うことができる。現在、200程度にも上るイヌの認定品種の中には、体高10cm程度で体重1kgにも満たない小型犬種から、体高90cm程度、体重100kgを超える大型犬種までのヴァリエティがみられる。これは、イヌに対する人間側からの介入が長期にわたり続けられた結果生じたものである。さらに、両者の関係の深さは、人間社会でイヌが担う役割の広さにも表れている。イヌには、発達した嗅覚や聴覚、鋭敏さ、持久力、夜行性、順位制度などの特性に基づく多様な用途が課せられており、これまでも番犬や猟犬、牧羊犬、橇犬、軍用犬、食用犬、愛玩犬などの多数の利用事例が知られる。このように、イヌはとりわけ用途の広い動物であるために、文化ごとに選択されるイヌの用途には、文化的特性や動物観が色濃く反映されているとみなすことができる。

広大な面積を有する北東アジアでは、(1)タイガの狩猟・漁撈民や、(2)大河流域の漁撈民、(3)極北の海獣狩猟民、(4)タイガの狩猟・トナカイ飼養民、(5)ツンドラのトナカイ飼養民、という複数の経済的・文化的類型が知られる(レーヴィン1960、松園1962、佐々木1991)。このうち、イヌは、(4)を除いた全ての類型において、重要な構成要素の一つと説明されており、民族誌からも、イヌが橇を引き、狩猟のパートナーとされる他、食料資源や道具素材、犠牲獣などの多岐にわたる役割を担ったことが見て取れる。前述したように、イヌは人間との関わりが深い動物であるために、形質的特徴や利用内容には両者の関わりや文化的特性、動物観が反映しやすい。さらに、イヌは人間に伴って移動することが多かったとみられるため、人工遺物とは異なる側面から、海獣狩猟文化内での地域間関係や周辺文化との接触について検討する上での好資料となり得る点は見逃せない。そのため、本章では、イヌの遺存体とそれらを素材とした製品、イヌを意匠した遺物の集成に基づくイヌ利用の時期的変遷と地域差についての把握を試み、海獣狩猟文化の発達過程を跡付ける上での材料に供したい。

#### 第1節 イヌについて

イヌ (*Canis familiaris*) は分類学上、食肉目(ネコ目) 裂脚亜目(ネコ亜目) イヌ科イヌ属に属する。イヌ属動物には、イヌの他に、大きく分けてオオカミ (*Canis lupus* 他)、コヨーテ (*Canis latrans*)、ジャッカル (*Canis aureus* 他)、ディンゴ (*Canis dingo*) の4つのグループが知られるが、このうち、ディンゴはイヌの亜種 (*Canis familiaris dingo*)

として扱われることもある（猪熊 2001）。

イヌは、現在、世界中の至る所に分布しており、飼育頭数は全世界で約 3 億頭（田名部 1993）、日本だけでも 1 千万頭にも上るといふ（アングス 2002）。イヌは、一般に走行に適した細身の体つきをしているが（野澤・西田 1981）、200 近くもの認定品種が作り出されていることから明らかなように、形態的特徴にはかなりのヴァリエーションが生じている。イヌの前肢は 5 指、後肢は 4 趾で、歩行様式は、手足の指（趾）骨全体を地面につける趾行性である（野澤・西田 1981、金子 1998）。頭部は小さく、肉を切り裂く裂肉歯と大きな犬歯を特徴とする（野澤・西田 1981）。

イヌの祖先については、オオカミとみなす説や、オオカミの他にジャッカルやコヨーテの血が混じっているとす説、ディンゴのような原始的なイヌに似た野生イヌから進化したとする説などが提起され、長い間論争的になってきた（猪熊 2001）。しかし、社会性の強さや吠え声の複雑なパターンなどにおけるイヌとオオカミとの類似や、分子系統学から見る両者の強い近縁性（Vila et al. 1999）から、現在ではオオカミをイヌの祖先とみなす説が定説化している。

イヌは元来、食肉獣で歯牙は鋭利であったが、現在では動植物性の混合食を摂る雑食動物となり、消化器官は草食動物に近い発達を遂げている。また、現在では年中季節を問わず発情するようになりつつあるが、本来は春と秋の年 2 回の発情が最も多い。イヌの祖先とされるオオカミや、生活条件や栄養状態の悪いイヌでは、年 1 回のみの発情が多いとされる。妊娠期間は平均 62 日間で、出産 1 回につき 3~5 匹程度の仔を生むといふ（平岩 1989）。

イヌの骨格は、第 1 章で示したように、多数の骨で成り立っている（エバンス他 1981 [1971]、加藤・山内 1995a、b）（図 4）。

頭蓋は複数の骨で構成されており、成長とともに一部の骨が癒合する（図 5）。下顎骨は左右一対の骨であり、成長しても左右の下顎は癒合しない。

イヌの歯は、乳歯から永久歯へと一度生えかわる二生歯性である（後藤・大泰司 1986）。森忠男氏（1930）による現生犬の歯牙萌出・交換プロセスの研究によれば、イヌは、出生時には歯を有しておらず、生後 2 週間頃から乳歯の萌出が始まり、生後 5 週間頃までには全ての乳歯が萌出する。永久歯の萌出は、生後 4 ヶ月頃頃から始まり、生後 8 ヶ月頃までには全ての永久歯が生え揃い、歯根形成が完了する。本研究では、乳歯のみが萌出している個体を「幼獣」、永久歯が萌出し始め、歯根形成が完了するまでの個体を「亜成獣」、歯根形成が全て完了した個体を「成獣」として区別することとする。なお、永久歯が萌出完了した段階以降の個体についても、歯の咬耗の程度に基づく死亡年齢の査定基準が提示されているが（斎藤 1964）、歯の咬耗は加齢のみが要因ではなく、食料などの要素も深く関与するため、本研究では参考程度にとどめることとした。

イヌの脊柱（椎骨）は、50 個程の骨で構成されている（エバンス他 1981 [1971]）。頸椎 7 つ、胸椎 13 個、腰椎 7 つ、仙椎 3 つ、尾椎 20 個が基本だが、それぞれの個数は個体ごとで前後する場合がある。なお、仙椎は成長するに従って 3 つが癒合し、1 つの仙骨と

なる。肋骨は 13 対あり、前位 9 対は直接胸骨と関節する。胸骨は 8 つの不對な分節からなる。

前肢骨には、肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨 5 つの他、指骨である基節骨 5 つ、中節骨 4 つ、末節骨 5 つなどが含まれる。一方、後肢骨には、寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、踵骨、距骨、中足骨 4 つの他、趾骨である基節骨、中節骨、末節骨各 4 つなどが含まれる。食肉目などの雄に見られる陰莖骨は、イヌにおいてよく発達している（加藤・山内 1995b、大森司 1998、阿部 2000）。

## 第 2 節 出土資料

### (1) 遺存体

#### a. 縄文時代における遺存体（表 4、図 10）

縄文時代に属するイヌの遺存体は、北海道の 20 程の遺跡から確認されている。もっとも古い事例は、前期に属する網走市天都山貝塚（畠山 1967、1973）（註 1）と同大曲洞穴（金子 1967）、釧路市東釧路貝塚（金子 1968、1986、沢 1969、畠山 1973）、苫小牧市美沢 4 遺跡（財）北海道埋蔵文化財センター1980）、白老町虎杖浜 2 遺跡（財）北海道埋蔵文化財センター2002a）、虻田町入江遺跡（峰山 1972）から得られている。このうち、天都山貝塚事例と東釧路貝塚事例は、ともに中型犬で形質的特徴が類似するとされ、美沢 4 遺跡では小型犬と中小型犬の 2 つのタイプのイヌが存在した可能性が指摘されている。さらに、天都山貝塚では、イヌの頭部のみが焼土上面で出土し、骨に損傷が認められることから、食料に供されたものと推測されている。東釧路貝塚では、ベニガラを多量にふりかけられた埋葬事例があるという。

中期におけるイヌの検出事例は少ないが、常呂町トコロ貝塚では海獣類に次いで多く出土が確認されている（東京大学文学部 1963、北海道常呂郡端野町教育委員会 1972）。これらは全て中型犬であり、各文化層から少量ずつ出土していることから、「家犬の占めていた生活上の位置が、相当度に高い」（前掲書：233 頁）と推測されている。さらに、保存状況が良好でないながらも、上顎骨や下顎骨、椎骨などが揃って出土したことから、埋葬された可能性も指摘されている。また、泊村茶津貝塚では、中期から後期初頭に属するイヌの遺存体が出土しており、乳歯の出土量が多いと報告されている（北海道文化財研究所 1990）。同遺跡では、人間の乳歯も多く出土することから、乳歯に対して何らかの価値を見出していた可能性が高いとみられている。

後期には全道的にイヌの検出遺跡数が増すが、1 遺跡から出土する量はそれほど多いものではない。唯一、道南部の八雲町コタン温泉遺跡（北海道八雲町教育委員会 1992）からは、最小個体数で 9 個体分（幼獣 2、亜成獣 5、成獣（老獣）2）の出土が報告されている。このうち、まとまって出土する例は少なくとも 4 個体分あったとされ、散乱した状態で出土

表4 イヌの遺存体と製品の出土遺跡一覧(1) 縄文・続縄文時代

No.	遺跡名	遺存体 / 製品*						備考	出典
		縄文				続縄文			
		前	中	後	晩	前	後		
1	浜中2			△		◎ / 1		続縄文では幼・亜成獣多い	1
2	オジョンナイ2					○		亜成獣多い	2
3	上泊4					(+)		亜成獣	3
4	種屯内					◎		幼・亜成獣多い	4
5	ウスタイベ						△		5
6	柴浦第一						△		6
7	トコロ		○					埋葬?	7
8	網走市役所工事現場						(+)		8
9	天都山	+						焼土上、損傷、中型	9
10	大曲洞穴	+							10
11	開成4						(+)**		11
12	オタフク岩洞窟						△		12
13	下田ノ沢					+			13
14	東釧路	+						埋葬例を含む、中型	14
15	幣舞				○			被熱	15
16	江別太					◎		墓からの出土例含む 幼・亜成獣多い	16
17	K135遺跡 5丁目					○		中小級の小型犬	17
18	オサツ2						△	焼土より出土	18
19	美々		△						19
20	美々4 呑口			△					20
21	美沢4	△						2タイプ(小型・中小型)	21
22	柏原5				△			被熱	22
23	虎杖浜2	△							23
24	鷺別			+					24
25	ボンナイ					(△)			25
26	舟見町						(+)		26
27	有珠砂丘(F)					△			27
28	有珠7					△			28
29	有珠10					△		小型	29
30	南有珠6					△		小型	30
31	オヤコツ					△			31
32	有珠善光寺2				(△)			小型	32
33	入江遺跡	△		(+)					33
34	入江貝塚		(+)						34
35	小幌洞窟(B)					△			35
36	忍路土場			△				被熱	36
37	フゴッペ貝塚		△						37
38	茶津洞穴					△	△		38
39	茶津貝塚		△					小型、乳歯多い	39
40	畑株1		△		△			被熱(中期末～後期初)	40
41	照岸洞窟				(+)				41
42	栄磯岩陰				(△)			中型・中大型	42
43	三ツ谷				? / 1				43
44	寺町			△				埋葬?、小型	44
45	戸井			△					45
46	尾白内					△			46
47	コタン温泉			○				埋葬、小型	47

\* 遺存体欄の記号は獣類中の割合を示す 主体:◎、多い:○、少ない:△、割合不明:+、出土なし:-、出土の有無不明:?  
製品欄の数字は出土点数を表し、出土していない遺跡は無記入である  
( )内は、所属時期の断定が困難な資料である

\*\* 所属年代は続縄文～檜文と報告されている

No. : 縄文時代は図10、続縄文時代は図11の遺跡番号に対応



図 10 イヌの遺存体とそれを素材とした製品の分布(1) 縄文時代

した資料も含めて、本来は全て埋葬されていたものと推測されている。形質的には、本州の縄文犬と同じ小型犬であるという。同じく道南部に位置する縄文時代後期の松前町寺町貝塚（北海道松前町教育委員会 1988）では、同一個体の上顎骨と下顎骨、四肢骨の一部がまとまって出土しており、埋葬された可能性が指摘されている。小型犬であるという。

晩期にイヌの遺存体を出土する遺跡は少ない。この時期に属する可能性のある伊達市有珠善光寺 2 遺跡（北海道伊達市教育委員会 1989）では、イヌが散乱した状態で出土しており、亜成獣の頭蓋骨と椎骨、上腕骨がまとまって出土する例があるという。この亜成獣個体も含め、出土資料はいずれも小型犬であると報告されている。

縄文時代に属するイヌの遺存体の中に、被熱した資料の含まれる場合がある。縄文時代には、特に後・晩期を中心として、被熱した動物骨を出土する遺跡が認められており、焼土や盛土遺構などに伴う例が多いことや、同時期に焼人骨の検出例（渡辺 1998）がみられることから、火に関わる葬送儀礼に際し、動物が焼かれた可能性もある。イヌについても、そのような儀礼体系の中で焼かれる場合があったのかもしれないが、被熱したイヌの出土例は、他の動物に比べてそれほど多いものではない。

サハリンでは、縄文時代に併行する時期の動物遺存体の報告例がなく、この時期におけるイヌ利用の様相は不明である。

#### b. 続縄文時代（アニワ文化期）における遺存体（表 4、図 11）

表 4 から明らかなように、イヌの遺存体が出土する遺跡の数は、縄文時代晩期末葉から続縄文時代前半期にかけて全道的に増加する。このうち大半の遺跡では、小型犬が少量ずつ出土しているに過ぎないが、近年、一部の遺跡に限って、多量の出土が報告されることとなった（内山 2003a）。これに該当する遺跡は、礼文町浜中 2 遺跡（西本編 2000）、同オシヨナナイ 2 遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）、利尻町種屯内遺跡（前田・西谷 1997、種屯内遺跡調査団 1998～2002、2004）、釧路市幣舞遺跡（北海道釧路市教育委員会 1990、北海道釧路市埋蔵文化調査センター 1994、1996、1999）である。

このうち、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭にかけての層と続縄文時代前半期の層が連続して堆積していた種屯内遺跡（前田・西谷 1997、種屯内遺跡調査団 1998～2002、2004）では、発掘面積が狭いにも関わらず、両層を合わせて最小 17 個体分のイヌの出土が確認されている。年齢構成比は、幼獣 4、亜成獣 9、成獣 4 個体である。なお、成獣とした資料全てにおいて歯の咬耗はほとんど認められておらず、永久歯が生え揃った後、それほど年月を経ないで死亡した個体とみなせる。この遺跡では、頭部が遊離した状態で多く出土する一方で（図 12）、四肢骨の出土数が少ないという部位の偏りが認められている。幣舞遺跡（北海道釧路市教育委員会 1990、北海道釧路市埋蔵文化調査センター 1994、1996、1999）でも、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭、および続縄文時代前半期にかけての層から多量のイヌの出土が確認されている。この遺跡では、最小個体数が 36 個体以上であり、年齢構成比は、幼獣 7、亜成獣 11、成獣 18 個体以上である。成獣のうち、2 歳以上と

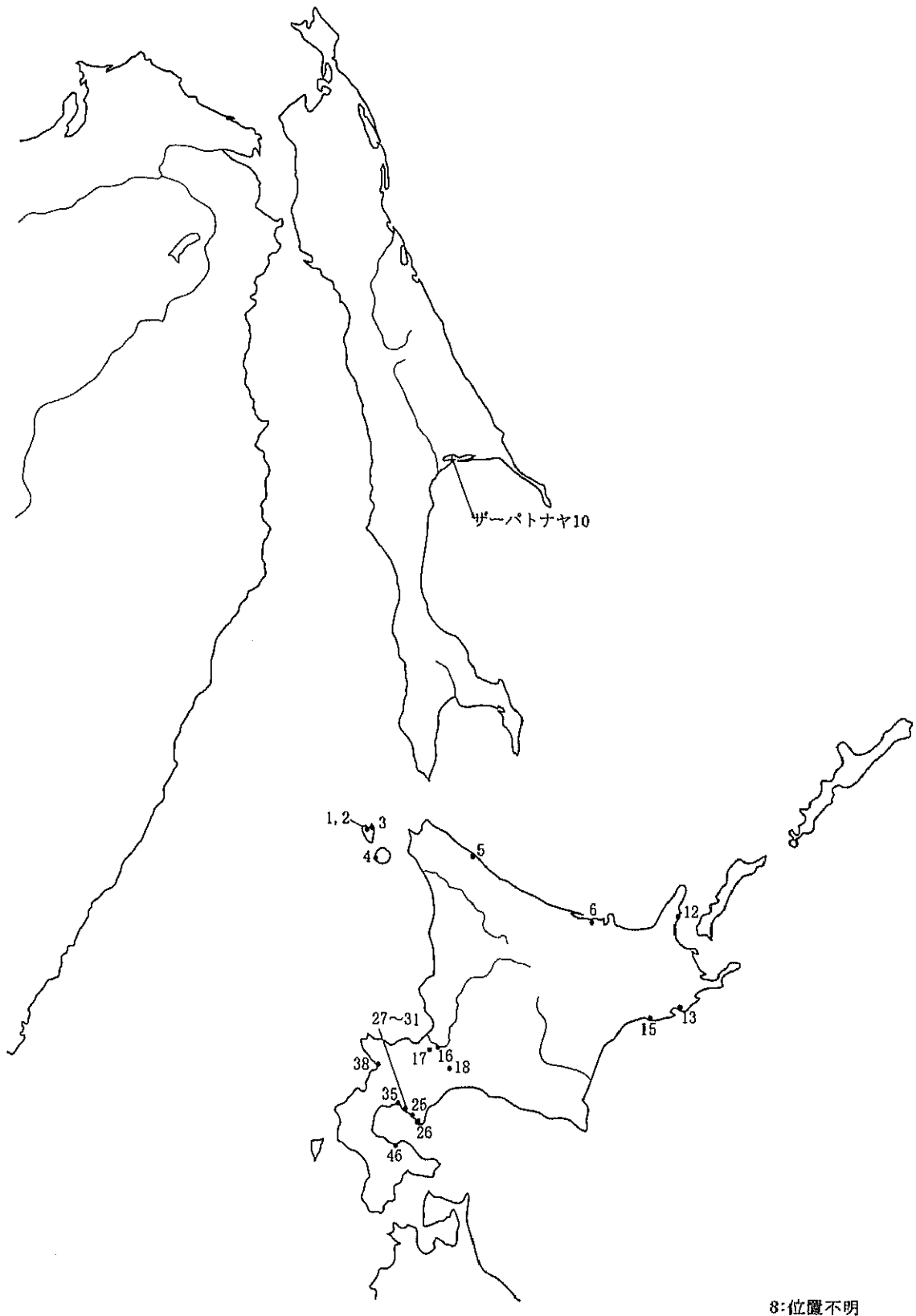


図 11 イヌの遺存体とそれを素材とした製品の分布(2) 続縄文時代

みられる資料は脛骨 1 点のみであるという。これらの遺存体は全て散乱した状態で出土しており、種屯内遺跡と同様に、頭部の出土数に比べて四肢の出土数が少ないと報告されている。また、上顎骨と下顎骨の中には、縄文時代のイヌとは系統的に異なる大型犬が含まれているという。さらに、イヌの遺存体の中には、頭蓋骨破片や顎骨、四肢骨がまとまって墓壙から出土する例も確認されている。

前半期に属する浜中 2 遺跡（西本編 2000）では、1994～1997 年の調査分だけでも、イヌの最小個体数（前頭骨（左）で算出）が 50 個体にのぼる。下顎骨（右）では最小 42 個体分が得られており、幼獣 19、亜成獣 13、成獣 10 個体という年齢構成を示す。成獣とされた資料の中に、歯牙の咬耗の進んだ老獣個体は含まれていない。1 個体分が揃って出土した例はなく、どれも散乱した出土状況を示すが、頭部から頸椎、前肢、腰部がそれぞれまとまって出土する例もみられる（図 13）。出土状況や年齢構成などから、これらのイヌは解体を伴う用途、すなわち食料資源として利用されたものと推測される。また、形質的特徴の明らかな成獣個体の中には、縄文犬や弥生犬、道央部の続縄文犬とは大きさにおいて歴然とした差異の認められる個体が含まれており、頭蓋骨を対象に行った多変量解析の結果からも、縄文犬や弥生犬とは形質的に異なり、後続するオホーツク文化期に属するイヌとの類似性の高い個体が含まれることが示されている（内山・松村 1997）。なお、浜中 2 遺跡では、詳細未公表である別地点の調査でも、同時期に属するイヌが多量に出土していることが筆者の実見により明らかであるため、当遺跡に遺棄されたイヌの個体数はさらに増すことが確実である。浜中 2 遺跡と同じ礼文島に位置し、続縄文時代前半期に営まれたオションナイ 2 遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）でも、イヌが海獣類に次いで多く確認されている。最小個体数は 2 個体であり、上記の遺跡に比べれば少ないが、この中には幼獣と亜成獣が 1 個体ずつ含まれている。この遺跡でも、イヌは散乱した出土状況を示し、頭蓋骨と頸椎、中足骨がそれぞれまとまって出土する例もみられる。

続縄文時代後半期は、北海道北部を中心に、オホーツク文化に属する鈴谷式土器や十和田式土器が併行して分布する時期にあたる。続縄文時代後半期に属するイヌの遺存体は 6 遺跡で確認されているが、いずれも出土量は少量に限られる。

続縄文文化は、前半期にサハリン南部にも分布域を拡大しており、サハリンではアニワ文化（Анивская культура）と称されている。続縄文文化（アニワ文化）に属するサハリン南部の遺跡で、動物遺存体の報告例はこれまでのところ知られておらず、イヌ利用の内容は不明である。

#### c. サハリン中部ザーパトナヤ遺跡群における遺存体（表 5、図 11、15）

サハリン中部のザーパトナヤ 10、同 11、同 12 遺跡では、続縄文時代からオホーツク文化期に併行する可能性のあるイヌの遺存体を得られている。これらの遺跡で出土している土器群は「ザーパトナヤ 10 タイプ土器（Керамики типа Западное-10）」（Федорчук 1998）と総称されるもので、土器や遺跡立地の類似性から、アムール河河口部に位置するバリシ



ヤヤ・ブフタ 1 遺跡 (シェフコムード 2003 [2002]) との関連性が指摘されている (デリユーギン 1994、木山他 2003)。ザーパトナヤ遺跡群の主任調査者であるフェドルチュク氏は、ザーパトナヤ 10 タイプ土器群を伴うテルペニア湾岸の遺跡に対して、紀元後 1 千年期前半という推定年代をあてている (Федорчук2002) (註 2)。編年位置に関してはこの他にも、(1)統縄文時代前半期、(2)鈴谷期から十和田期への移行期、(3)十和田期、にそれぞれ併行するという諸説が提示されている (野村 1990、山浦 1995、熊木 2000、小野・天野 2002、木山他 2003)。近年の発掘調査成果によれば、この土器群は型式学的・層位学的に新旧関係のある 3 つの段階に細分することが可能であるという (木山他 2003)。このうち、十和田式土器の古段階 (突瘤文段階) (天野 1998、天野・小野 2002) との関連性が指摘されているのはⅢ群 2 類土器であり、ザーパトナヤ 10 タイプ土器群を詳細に検討した木山克彦氏ら (2003) によって、Ⅰ、Ⅱ群土器を統縄文時代前半期 (アニワ文化期のプレドリェフリヤンカ段階併行 (註 3))、Ⅲ群土器をオホーツク文化の鈴谷期後半から十和田期初期に併行させる編年案が提示されている (表 1)。

ザーパトナヤ 10、同 11、同 12 遺跡では周囲に土手を盛った住居址が多数検出されており、カキを主体とする貝層が点在する。ザーパトナヤ遺跡群では、獣類の中でイヌがもっとも多く出土しており、アザラシ類、トナカイがこれに続く (前田他 2001)。2002 年にザーパトナヤ 10 遺跡で実施された発掘調査によれば、イヌの遺存体は、ザーパトナヤ 10 タイプのⅡ群土器を包含する層とⅢ群土器を包含する層のそれぞれで多く出土することが確認されている (註 4)。これまでに出土した資料を分析した結果、ザーパトナヤ 10 遺跡では、最小 10 個体分のイヌが得られており、年齢構成比は、幼獣 6、成獣 4 個体である。成獣個体では、歯の咬耗がほとんど認められておらず、永久歯の萌出完了後、それほど時間を経っていない個体であるとみられる。また、未公表資料であるが、同 11 遺跡では、1995 年の調査によって、最小 12 個体分のイヌが出土している。この中には幼獣 11、亜成獣 1 個体が含まれており、成獣は認められていない。同じく未公表資料であるが、同 12 遺跡では、1991 年の調査によって、幼獣と成獣が 1 例ずつ出土している。

以上のように、ザーパトナヤ遺跡群では、イヌはいずれも散乱した出土状況を示し、頭部のみ、もしくは頭部から頸椎の一部が遊離した状態で出土する例が確認されている (Федорчук1998)。特に、ザーパトナヤ 10 遺跡では、このような出土例が多く、最小 10 個体のうちの 7 例を占める (図 14)。また、同遺跡の調査では、ピット中から、イヌの腰部や椎骨、肋骨などがまとまって出土する例も確認されている。以上の事例は、部位ごとに遺棄する場所が異なっていた可能性を示唆するとともに、当時の解体方法を復元する上で注目される。ザーパトナヤ遺跡群では、イヌが散乱して出土することや幼獣、亜成獣に偏る年齢構成を示すことから、その利用目的が、解体を伴う使途、すなわち肉の採取にあつたものと推測できる。



図 12 犬骨出土状況(1) 種屯内遺跡 縄文時代晩期末葉～続縄文時代初頭

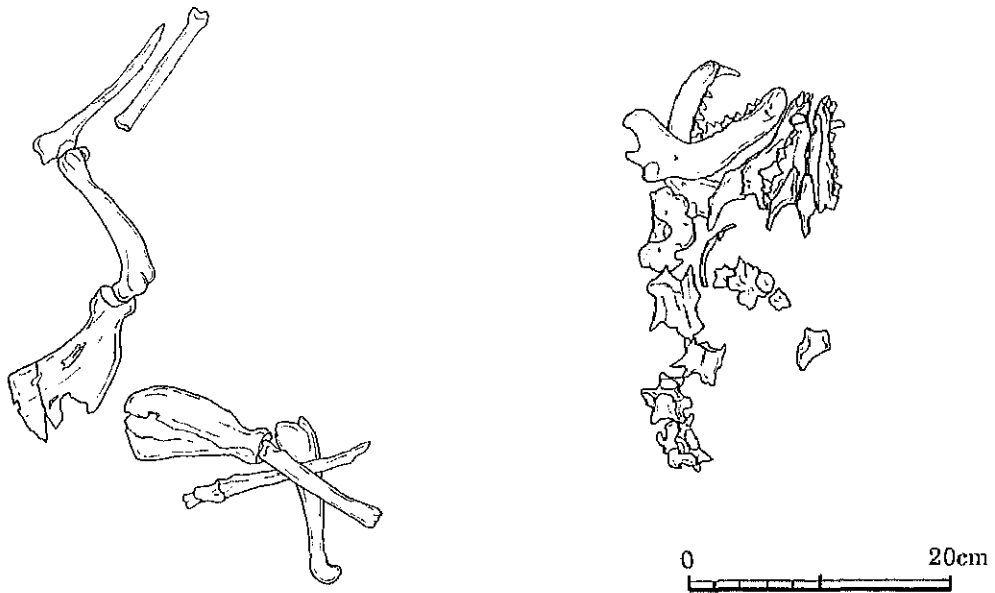


図 13 犬骨出土状況(2) 浜中 2 遺跡 (西本編 2000) 続縄文時代前半期



図 14 犬骨出土状況(3) ザーパトナヤ 10 遺跡 ザーパトナヤ 10 タイプ土器期

表5 イヌの遺存体と製品の出土遺跡一覧(2) ザーパトナヤ 10タイプ土器期

No.	遺跡名	遺存体 / 製品		備考	出典
		続縄文 前併行	オホーツク併行 初 前		
-	ザーパトナヤ10	(◎)	(◎)	幼・亜成獣多い	1
-	ザーパトナヤ11		(◎)	幼・亜成獣多い	2
-	ザーパトナヤ12		(◎)	幼・亜成獣多い	3

d. オホーツク文化期における遺存体 (表6、図15)

オホーツク文化期の遺跡のうち、イヌの遺存体が出土したと報告されているのは、北海道とサハリンを合わせて50程の遺跡においてである。このうち、戦前に行われた調査の資料を中心とするサハリンでは、動物遺存体の出土層位や伴出遺物が明記されていない例がほとんどであるために、より詳細な時期の認定が困難な資料が多い。このような事情から、北海道での確実な出土例を欠く鈴谷期の事例は、サハリンの2遺跡のみにとどまる。鈴谷貝塚(ススヤ遺跡)では、鈴谷式土器に伴って「シベリヤ犬」(伊東1942:42頁)とされるイヌが出土していることが報告されている。また、留多加貝塚では、「十和田式それ以降の土器がほとんど出ない」(和田1942:150頁)とされる貝塚より、イヌの出土が認められている。北海道では、稚内市オンコロマナイ貝塚(大場・大井編1973)や利尻富士町役場遺跡(北海道利尻富士町教育委員会1995)において、鈴谷式土器が他型式の土器と混在している層からイヌの遺存体を得られており、この中には鈴谷期に属する資料が含まれる可能性もある。

十和田期に属するイヌの出土遺跡数も、多くはない。サハリンでは確実に十和田式土器に伴うといえる資料がなく、北海道では、礼文町浜中2遺跡(前田・山浦2002、西本2002)と同香深井1遺跡(大場・大井編1976、1981)に限られる。このうち、浜中2遺跡は詳細が未公表であるが、最小個体数は10個体を超え、老獣個体はほとんど含まれてはいない(註5)。香深井1遺跡では、最小9個体分が得られており、年齢構成は幼獣2、亜成獣1、成獣6個体である。両遺跡とも、イヌは散乱した状態で出土しており、特に前者では、数頭分のイヌの遺存体が2つの固まりにまとめられて雑然と堆積した例も報告されている(図16)。ただし、規則的な配置が行われているわけではないため、利用の後、まとめて遺棄されたものと考えられる。

オホーツク文化の中期にあたる刻文期、江ノ浦期には、サハリンと北海道で、イヌを出土する遺跡数の増加が認められる。これは、この時期にオホーツク文化が分布圏を拡大することと不可分な現象ではない。事実、この時期になると、それまで基本的にオホーツク文化圏外にあったサハリン中部や道東部の遺跡においても、イヌの出土例が報告されるようになる。このうち、イヌが多く認められている遺跡は、礼文町浜中2遺跡(前田・山浦2002)と同香深井1遺跡(大場・大井編1976、1981)、根室市トーサムポロ遺跡(北構・須見1953)である。特に、香深井1遺跡(大場・大井編1976、1981)における前時代からの出土比率の増加は顕著であり、海獣類に匹敵するほど多くの出土量を得ている。同遺

表6 イヌの遺存体と製品の出土遺跡一覧(3) オホーツク文化期

No.	遺跡名	遺存体 / 製品*				備考	出典
		オホーツク					
		初	前	中	後・末		
1	ブロムイスロヴオエ2 (東多来加貝塚)				◎ / 2	埋葬例を1例含む	1
2	オストロブノエ2			△			2
3	ザーバトナヤ1				+		3
4	相浜		(+)				4
5	榮濱		(+)				5
6	南負咲		(+)				6
7	富内		(+)				7
8	スヴァボードノエ1				(+)		8
9	近泊		(+)				9
10	チルコーヴァ1				△		10
11	荒栗		(+)				11
12	カミサンノサワ				△		12
13	二号沢チャシ		(+)				13
14	三ノ沢		(+)				14
15	ススヤ(鈴谷貝塚、北貝塚)	+		(○)		製品1点(詳細な所属時期不明)	15
16	ソロビョーフカ(南貝塚)			△			16
17	留多加	+					17
18	リュトガ3			△			18
19	ノバヤブローチノエ2		(? / 1)				19
20	南浜通二丁目		(+)				20
21	遠節水源地澤		(+)				21
22	吐鯨保		(+)				22
23	南名好		(+)				23
24	イワノフカ		(△)				24
25	ブフタ・チュプロヴァ				(+)		25
26	船泊砂丘第二				(△)	人骨頭部の左上部より出土	26
27	浜中2		○	○	○	中期に前肢を欠く一括の出土事例が2例あり	27
	歴博調査			(◎)			28
28	香深井1		○	◎ / 6	◎	中～後期の石積み遺構より多量出土(供献?)	29
29	香深井5				△		30
30	香深井6				○		31
31	種屯内		(△)	△ / 1	△		32
32	亦稚貝塚		(△)		△		33
33	利尻富士役場		(○)				34
34	沼浦海水浴場				(△)		35
35	オンコロマナイ		(○)			幼獣ではほぼ全身の骨が揃う例あり	36
36	目梨泊				△		37
37	ホロベツ砂丘			△			38
38	柴浦第二 東大調査				△	屋内(骨塚)からの出土例を含む	39
	町教委調査				△		40
39	常呂川河口				△	屋内(骨塚)からの出土例を含む	41
40	トコロチャシ跡				△	屋内(骨塚)からの出土例を含む	42
41	モヨロ		(+)		△	屋内(骨塚)からの出土例を含む	43
42	二ツ岩				△	屋内(骨塚)からの出土例を含む?	44
43	能取岬西岸		(+)				45
44	ウトロ海岸砂丘				+		46
45	ウトロ 神社山地点			○		右前肢と手足先が墓直上より出土(副葬?)	47
46	トビニタイ				△		48
47	松法川北岸				△		49
48	合泊		(+)				50
49	トーサムボロ			○			51
50	オンネモト				△		52
51	弁天島西			△			53
52	弁天島				○		54

\* 遺存体欄の記号は哺乳類中の割合を示す 主体:◎、多い:○、少ない:△、割合不明: +、出土なし:-、出土の有無不明:?

製品欄の数字は出土点数を表す

( )内は、所属時期の断定が困難な資料である

No. : 図15の遺跡番号に対応

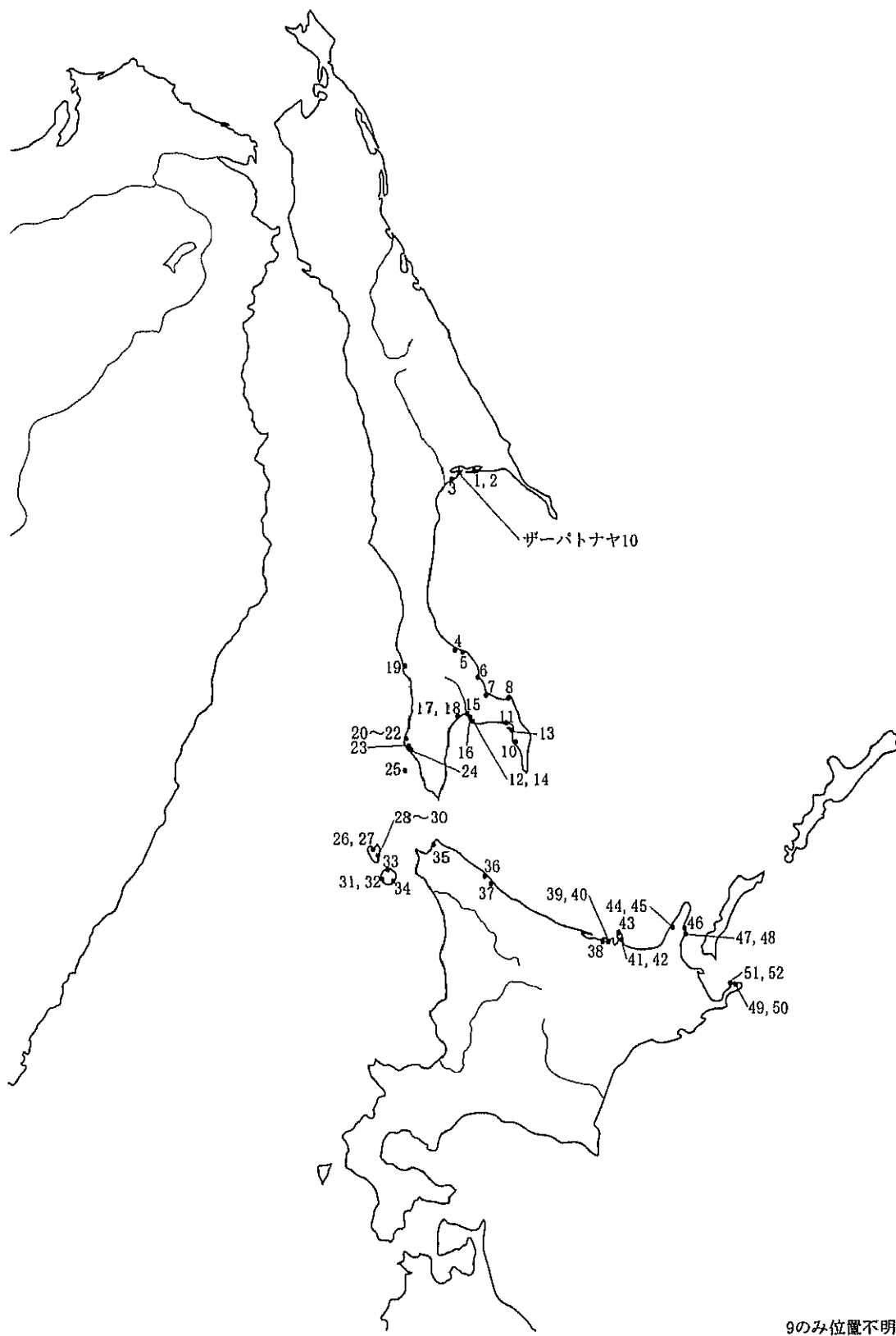


図 15 イヌの遺存体とそれを素材とした製品の分布(3) オホーツク文化期

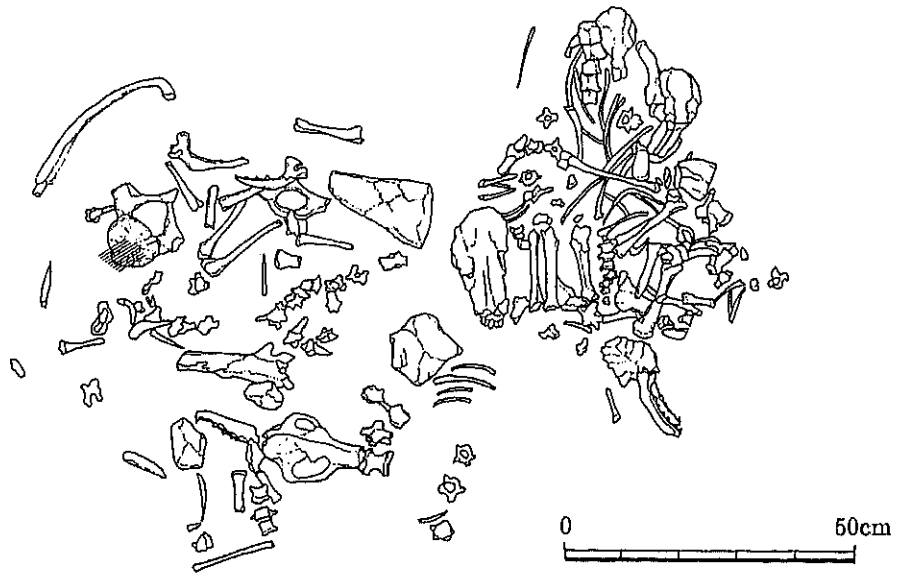


図 16 犬骨出土状況(4) 浜中 2 遺跡 (前田・山浦 2002) オホーツク文化期前期  
「イヌ骨集積 2」より出土

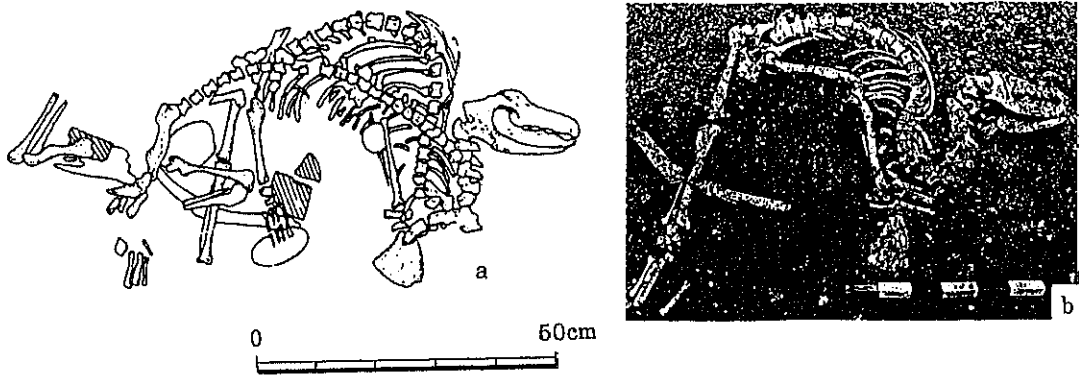


図 17 犬骨出土状況(5) 香深井 1 遺跡 (大場・大井編 1976) オホーツク文化期中～後期  
a、b: 石積み遺構基底部より出土 (a: 2 個体が重複 b: 上部の個体を取り除いたところ)

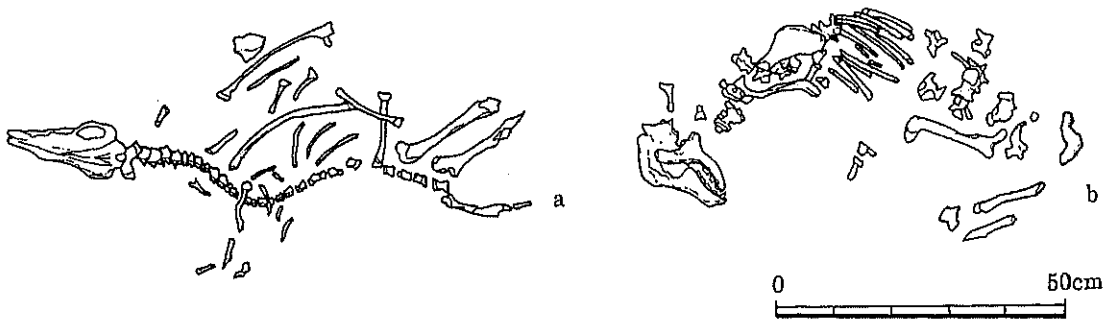


図 18 犬骨出土状況(6) 浜中 2 遺跡 (前田・山浦 2002) オホーツク文化期中期  
a、b: 「イヌ骨集積 1」より出土

跡では、刻文期から沈線文期にかけての層である魚骨層Ⅱにおいて、体部や四肢の一部がそれぞれまとまって出土する例や、ピット中から「あたかも安置されたかのように」（大場・大井編 1976：487 頁）イヌの頭部が出土する例も見られる。中でも注目されるのは、クジラ祭りの遺構とみなされている「石積み遺構」（魚骨層Ⅱ層中に構築）から、イヌの頭蓋骨 30 点が出土し、さらに、その基底部よりイヌの 2 個体分の骨格が重なって出土したことである（図 17）。後者のうち、1 例は頭部と前肢を欠き、もう 1 例も前肢を欠いているという。石積み遺構に伴って多量に出土したイヌについては、複数の「地域集団」により執り行われたクジラ祭りに際して、供献された可能性が指摘されている（大井 1978）。また、浜中 2 遺跡（前田・山浦 2002）でも、刻文期に属する層において、頭部から椎骨、肋骨、後肢がまとまって出土する例が 2 個体分認められており（図 18）、前肢を欠く点では香深井 1 遺跡の出土事例と共通する。トーサムボロ遺跡（北構・須見 1953）では、幼獣や亜成獣が多く出土し、骨に刃物の痕跡が残る資料もみられることから、1 歳未満の仔犬を食用として多数利用していたものと推測されている。また、根室市弁天島西貝塚（北地文化研究会 1968、1979）では、頭部から椎骨が一括して出土する例があり、また傷も認められたことから、食用として利用されたとみられている。また、未公表資料であるが、根室市弁天島遺跡からは、ピット中からイヌの頭部が得られているという（註 6）。さらに、この時期には、斜里町ウトロ遺跡神社山地点（石田他 1994）において、イヌの四肢の一部や中手・中足骨および指（趾）骨を中心とした手足先の部分が墓壙の直上から出土している事例が確認されており、意図的に副葬されたものとみられている。

後・末期の沈線文期、貼付浮文期、元地期、トビニタイ期、南貝塚期、東多来加期には、イヌの遺存体を出土する遺跡数がさらに増加する。ただし、多量に出土する遺跡はそれほど多いわけではない。北海道では、20 程の遺跡で遺存体が得られており、遺跡数は道北部、道東部でともに多い。道東部では、食糧残滓である貝塚や竪穴内に設けられた動物儀礼の痕跡である「骨塚」などからの出土例が中心であるが、出土量は少量に限られる例がほとんどである。根室市弁天島遺跡（西本編 2003）では、トビニタイ期に属する貝層中から、イヌが最小個体数 12 と割合多く出土している。年齢構成は、幼獣 4、亜成獣 4、成獣 3、老獣 1 個体である。頭部から椎骨がまとまって出土する例がみられる。また、頭蓋骨 2 点で陥没骨折が認められたことから、撲殺された後、食用として利用されたものとみなされている。道北部では、礼文島、利尻島の遺跡を中心に沈線文期に属する多くの遺存体が得られている。礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）では、前時代に引き続き、海獣類に匹敵する程の出土量がある。礼文町香深井 6 遺跡（北海道礼文町教育委員会 2001）でもイヌが比較的多く得られており、頭部から椎骨がまとまる例や、頭部から椎骨、肋骨がまとまる例、椎骨や肋骨、腰部がまとまる例の他、中手骨が一括して出土する例など、当時の解体方法を類推する上で注目される出土状況が認められている。また、礼文町船泊砂丘第二遺跡（児玉・大場 1952）では、骨製円盤や動物意匠のついた骨製小刀を副葬品として伴った成人女性の頭部の左上部より、イヌの頭骨 1 点が出土したとの報告がある。墓

曠自体は沈線文期に属する可能性が高いとされる。検出状況の写真は不鮮明であるが、人骨頭部の左上部には骨らしきものが認められる。この資料については、副葬されたと明記されているわけではないが、仮にこれが人骨に伴うとすれば、当該期におけるイヌの利用内容や価値を考える上できわめて重要な事例となる。

サハリンでは、この時期に属するイヌの遺存体が複数の遺跡で確認されているが、多量に出土する事例は、中部に位置する東多来加期のプロムイスロヴォエ 2 遺跡（東多来加貝塚）（直良 1939b、1957、1973、斎藤 1938、甲野 1938、馬場 1940、高橋 1940a～d、内山 2000、2002a、b）に限られる。この遺跡は、古くから、南部のススヤ遺跡と並んで多量のイヌを出土する遺跡として知られており、その出土量は、1940年に提出された論考の中ですでに「百数十體」（馬場 1940：115頁）と記されている。1994、1995年にフェドルチュク氏によって行われた発掘調査による出土資料について定量的に分析した結果からも、出土獣類の中でイヌが主体を占めることが明らかであり、全量の分析が未了であるにも関わらず、最小個体数は 67 個体にも及んでいる（内山 2002a、b）。年齢構成は、幼獣 24、亜成獣 9、成獣 34 個体である。成獣の中に、歯に咬耗が認められる資料はほとんど含まれていないことから、比較的若い個体が中心であったとみられる。これらの大半は、散乱した出土状況を示す。出土資料の中には、すでに斎藤弘氏（1938）や直良信夫氏（1939、1947、1957）によっても紹介されているように、頭蓋骨や下顎骨などに傷が認められる資料もある（図 19）。出土状況や年齢構成、傷の存在から、イヌが生前に訓練を要するような猟犬や使役犬としての役割を担っていた可能性は低く、主として肉や毛皮の採取のために利用されていたものと推測される。さらに、注目すべきことに、この遺跡では、1995年に行われた発掘調査によって、オホーツク文化では初見のイヌの埋葬例が 1 例認められている（内山 2000）。埋葬犬は、右半身を下にした状態で横たえられており、前足を後方へ伸ばし、後足を強く屈曲させ、四足の先を揃えるような状態であった（図 20）。また、縄文時代の埋葬犬では頭部を胴部（腹）側へ丸めた姿勢が多いのに対し、本例は首を伸ばした状態であるのが目を引く。脊柱や右前肢に一部骨が乱れた箇所が見られるが、調査時における乱れである可能性も大いに考えられ、それを除けば、解剖学的位置はほぼ正確に保たれていたといえよう。発掘担当者であるフェドルチュク氏によれば、埋葬犬の上部には小さい巻貝類が散布しており、多数の副葬品を伴っていたという。加えて、埋葬地周辺には火をたいた痕跡が認められるとともに、10 数個体分のイヌの頭部が散乱した状態で出土していたという。これらは、埋葬犬に関連するものとみなされている。このイヌには、陰茎骨が伴っていたことから雄であることが明らかであり、骨の観察から、比較的若い成獣個体であるとみなせる。歯列不正や歯周症の症状がみられ、さらに、中手・中足骨 3 点には、重度の骨増殖を起した痕跡が認められた。そのため、生前の歩行に際しては、かなりの困難さを伴ったことが推測される。埋葬犬はこの資料以外には認められていないが、オホーツク文化期のイヌの利用内容や価値について検討する上で、きわめて重要な資料と位置づけられよう。



オホーツク文化期に属する資料の中で、詳細な所属時期の特定が困難な事例は多い。礼文町浜中2遺跡（西本編 2000）では、1994～1997年に行われた調査によって、オホーツク文化期に属するイヌが最小で51個体分も得られている。出土土器には、十和田期から沈線文期までの土器が含まれているため、イヌの利用がこれら複数の時期にわたるものであるのか、特定の時期に利用されたものなのか、定かでない。このうち、成獣に達しない個体は8割近くに上り、幼獣の占める割合は7割程もある。また、利尻島に位置する利尻富士町役場遺跡（北海道利尻富士町教育委員会 1995）でも、多くの遺存体が得られているが、

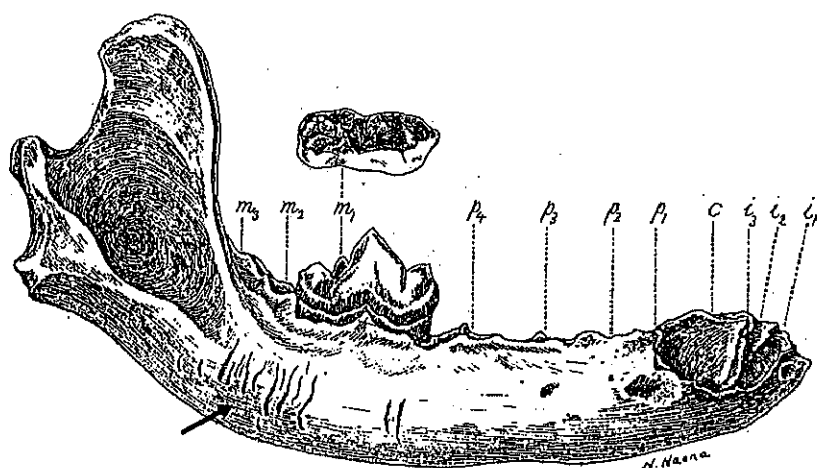


図 19 傷のあるイヌの下顎骨（東多来加貝塚）（直良 1939b）縮尺不明



図 20 埋葬犬（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）

出土層位から複数型式の土器が得られているため、所属時期の特定ができない。ともに幼獣個体を含み、後者では、頭部が単独で出土する例や頭部から椎骨がまとまって出土する例も確認されている。四肢は少ないとされ、解体された後、食用として利用されたものと推測されている。稚内市オンコロマナイ貝塚（大場・大井編 1973）でも、複数型式にわたる土器が出土する層より、イヌの遺存体が得られている。顎骨に比べ四肢骨が少ないと報告されている。幼獣の頭部が2～3個体分まとまって出土する例や、2個体分の幼獣の全身骨がほぼ揃っている例も認められるという。幼獣に対して埋葬を含めた何らかの特別な処置が行われた可能性もある。ただし、大半の資料は散乱状態を示し、人為的損傷とみられる痕跡も認められることから、基本的には食用として利用されたとみなされている。また、網走市モヨロ貝塚では、サハリンのプロムイスロヴォエ 2 遺跡やススヤ遺跡と並んで多量にイヌが出土するといわれるが（註 7）（児玉 1950、直良 1957、1973、島山 1973 など）、動物遺存体についての正式な報告の中には、オホーツク文化期に属するイヌはあまり多く含まれていない（東京大学文学部 1964、網走市教育委員会 2001）。同遺跡からは、アイヌ期の遺物も出土しており、オホーツク文化期におけるイヌ利用の程度や内容については、現段階では明らかにし得ない。

## （2）骨製品・歯牙製品

イヌの遺存体を素材とする製品は、全時代を通じて少ない（表 7）。

縄文時代に属する資料としては、乙部町三ツ谷貝塚（大場・渡辺 1966、金子 1986）から出土した犬歯に孔を穿った製品 1 点が認められているのみである。後期末葉から晩期に属する資料である。

続縄文時代においても、礼文町浜中 2 遺跡（西本編 2000）から出土した器種不明品 1 点が報告されているにすぎない。この資料は、脛骨（左）中間部を利用したものであり、擦り切り技法により長さ 1 cm 強、幅 1.5mm 程度の溝が折れ線状に刻まれているという。図や写真が掲載されていないため、より詳細な形状については不明である。前半期に属する資料である。

オホーツク文化期に属する製品は、11 点確認されている。このうち 4 点がサハリンの遺跡から出土したものである。サハリン中部のネフスコエ湖に面したプロムイスロヴォエ 2 遺跡からは、橈骨（左）を素材とした柄が出土している。橈骨近位部に刃を挿入するための溝を粗く刻み、遠位部を切断しただけのシンプルなつくりである。後・末期にあたる東多来加期に属する未公表資料である。同遺跡では、「東多来加貝塚」と称されていた戦前の調査によっても、犬歯に孔を穿った製品 1 点が出土したことが報告されている（甲野 1938）。これに類似した製品が鈴谷貝塚（ススヤ遺跡）からも得られている（日本大学文理学部史学研究室 1966）。報告ではイヌの犬歯製とは明記されていないが、形態的特徴と全長から、その可能性が高いと判断した。この他に、サハリン南部西岸の日本海に面したノーバヤブローチノエ 2 遺跡（Васи́левский 1996）からは、上腕骨（右）に線刻の施された製品（図

表7 イヌの遺存体を素材とした製品

No.	遺跡名	時代	製品の概要			図番号
			形態的特徴	素材	全長 *	
43	三ツ谷	縄文後期～晩期	有孔品	犬歯	(35)	—
1	浜中2	続縄文前半	器種不明	脛骨(左・中)	(51.3)	—
1	ブロムイスロヴオエ2 (東多来加貝塚)	オホーツク後・末期	柄	橈骨(左)	115	—
		オホーツク後・末期	有孔品	犬歯	?	—
15	ススヤ(鈴谷貝塚)	オホーツク	有孔品	イヌ?犬歯	37	—
19	ノーバヤブローチノエ2	オホーツク	器種不明	イヌ科上腕骨(右)	?	図21-1
27	香深井1	魚骨層Ⅲ オホーツク中期	器種不明	上腕骨(右)	146	2
			器種不明	上腕骨(左)	(139)	3
			錐	尺骨(左)	(130)	5
			錐	尺骨(右)	(140)	6
			錐	尺骨	122	7
	魚骨層Ⅲ <sub>0</sub>		器種不明	上腕骨(右)	161	8
30	種屯内	オホーツク中期	器種不明	上腕骨(右)	150	4

\* ( ) 内は残存長(mm)

No. : 縄文時代は図10、続縄文時代は図11、オホーツク文化期は図15の遺跡番号に対応

21-1) が出土している。骨製とのみ報告されているが、掲載された実測図の形態から、イヌ科の上腕骨を素材としたことが分かる。大きさが不明であるため、イヌ科のうち、どの種に属する資料であるかは明らかにし得ない。中間部に描かれた線刻はクジラ狐の様子を表した可能性が指摘されている。図の中央部に見られる長い横線とその上に間隔をあけて刻まれた7つの短い縦線は舟と狐師を表し、その右斜め上にはクジラ様の線刻が認められる。舟の右端からは銚縄の可能性のある細い線が獲物にむかって伸びている。右端に認められる線刻は、別の獲物を表現したものかもしれない。オホーツク文化期において海上での狐の様子を表わした資料としては鳥骨製の針入れがよく知られているが、イヌ科の上腕骨に表わされたのはこの資料が唯一の例である。

礼文町香深井1遺跡(大場・大井編1976)からは、刻文期の層より、尺骨を素材とした錐が3点(6~8)出土している。3点とも遠位部を削って尖頭部を作出し、近位部を柄とするものである。このうち8では、関節部の一部が削り落とされている。同遺跡からは、上腕骨に線刻が施された資料3点(2~4)も出土している(大場・大井前掲書)。いずれも中期に属する。このうち、2では横位の刻線が数条施されるのみであるが、3では横位にめぐる沈線文の間を斜位の格子状文で埋めた模様や鋸歯状文などが認められる。さらに4では平行沈線文や鋸歯状文などが何条にも浅く刻まれており、上半部の後面稜部に7つの抉りが認められるなど、3点中でもっとも多くの装飾が施されている。資料の性格は不明である。

利尻町種屯内遺跡でも刻文期の層より、上腕骨(右)の中間部にv字状の線刻が横位に施された製品(5)が出土している(種屯内遺跡調査団1998)。中間部の3箇所(図中の網掛け部)には光沢が認められる。この資料では近位部の関節下が一部削られており、遠位部の滑車上孔が広げられた可能性もある。

以上、イヌの遺存体を素材とする製品について見た。縄文時代と続縄文時代については、出土資料が1点ずつと限られているため、イヌの遺存体を道具素材として利用すること

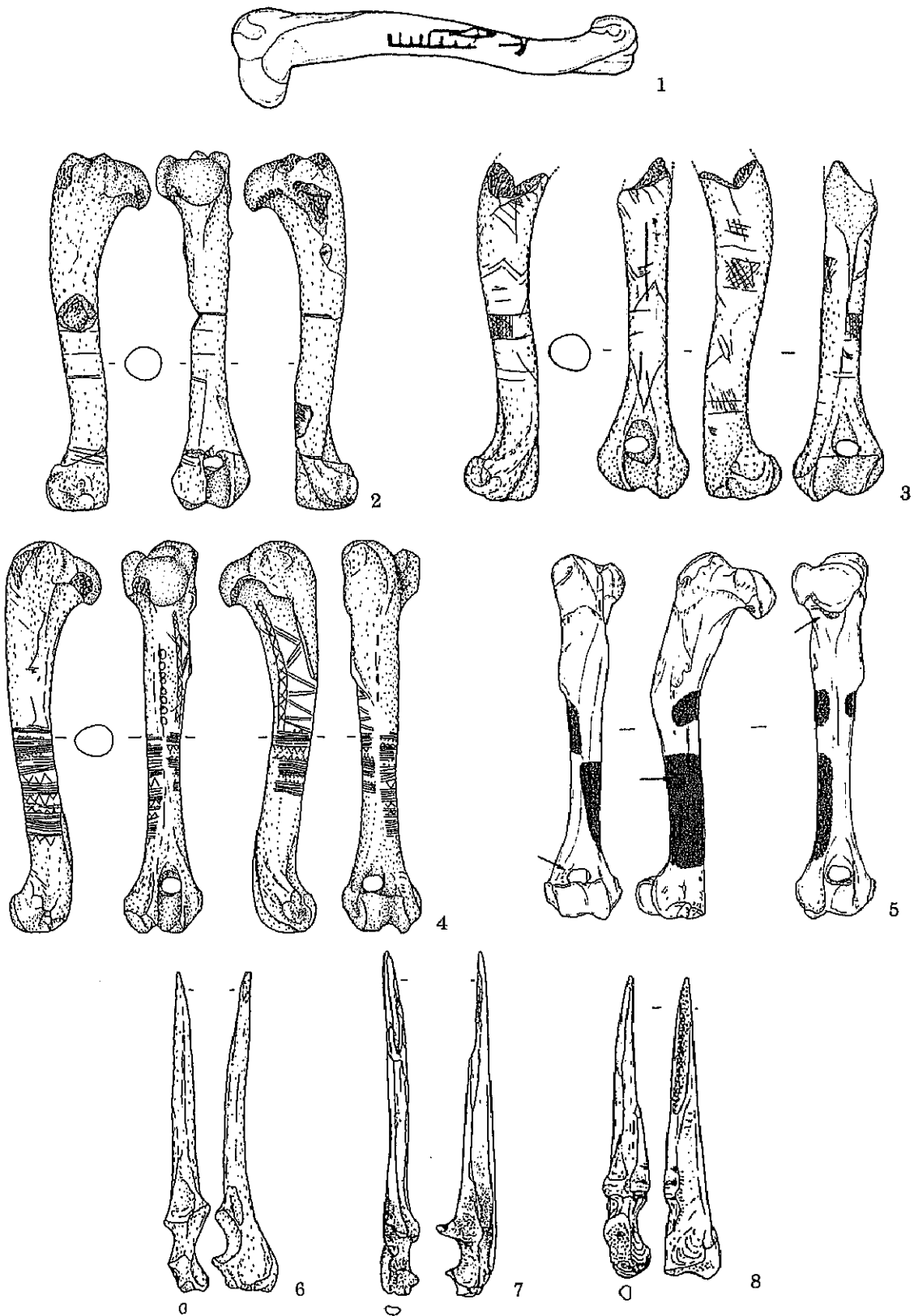


図 21 イヌの遺存体を素材とした製品 (オホーツク文化期)

1: ノーバヤブローチノエ 2遺跡 2~4、5~8: 香深井1遺跡 5: 種屯内遺跡

(1のみ縮尺不明、その他 2/5)

はほとんどなかったとみなすことができる。オホーツク文化期では製品 11 点が出土している。この出土量は前時代に比べて多いが、遺存体の出土量から類推される当時のイヌ利用の盛行を考慮すれば、オホーツク文化期においても、イヌの遺存体を道具素材として利用することは稀であったといえることができる。

### (3) イヌを模った遺物

イヌを模った遺物は、縄文時代、続縄文時代には得られていない。また、オホーツク文化期にも、確実にイヌを模したといえる動物意匠遺物は 1 例のみしか出土しておらず、その可能性のある資料も 3 例にとどまる（表 34～38：第 6 章に掲載）。

イヌの意匠は、サハリン南部西岸の日本海に面した十和田（註 8）から出土した土器片のスタンプ文に認められる（図 65 - 2：第 6 章に掲載）（岡・馬場 1943、Шоссонна 1996）。この土器片では、イヌの全身を模ったスタンプ文が連続して 3 つ押されているのが確認できる。これに類似したスタンプ文は、サハリン南部に位置する遺跡（註 9）から出土した土器片（3）にも見ることができる（Шоссонна 1996）。ただし、ここに表現された動物は、十和田出土の資料に比べて四肢が細く尾が太いなどの形態差があり、イヌやオオカミ、キツネといったイヌ科動物を模した可能性が高いとしかいえない。この他に、サハリン中部のプロムイスロヴォエ 2 遺跡からは、トナカイの角の根元近くを素材とし、イヌもしくはオオカミの全身を模った製品（1）が出土している。中央部には孔が穿たれており、吊るされて用いられた可能性もある。東多来加期に属する未公表資料である。

北海道側では、枝幸町で発見された資料（4）（坪井 1889）がイヌを模した可能性のある唯一の製品である。これは土器に「浮き模様」として表現されたものであり、頭の一部を欠くが、四足獣のほぼ全身の形を認めることができる。この資料の紹介者である坪井正五郎氏（1889）は、キツネにしては尾が太くなく、オオカミのように害をなす獣を意匠した可能性は低いとみて、イヌであろうと推測している。また、動物の下方にある 2 本の紐状の浮線については、動物を繋ぐ綱もしくは小山を表現したものと考えた。一方、北日本の動物意匠遺物を集成し、その分布や生活様式との関連について検討を試みた名取武光氏（1936）は、同資料について、オオカミの意匠と解釈しても差し支えないとの考えを示すとともに、紐状の浮線は土器の胴部にめぐる波状の貼付文の一部である可能性を指摘している。なお、この資料については、「稚拙ながら熊を表現した」（杉山 1932：433 頁）と見る見解もある。

以上に示した出土傾向からも明らかなように、イヌを模った遺物は、オホーツク文化期のようにイヌを比較的盛んに利用した時期においても稀であり、当時、イヌは意匠に用いる対象として位置づけられていなかったとみなすことができる。

### 第3節 形質的特徴の時期的変遷と地域差

#### (1) 各時代におけるイヌの形質的特徴

イヌの形質的特徴については古くから高い関心が払われ、頭蓋骨と下顎骨を主たる対象とした骨学的検討が盛んに行われてきた(斎藤 1938、1940 直良 1939、1973、高橋 1940c、1940d など)。これは、イヌが人間にもっとも身近な動物の一つであるために、人間の形質的特徴と同様に、イヌの形質的特徴の分析を通じて、人間の移動経路や周辺文化との接触を復元するのに寄与するものとみられたためである。事実、鈴谷式土器とともに、「シベリア犬」(伊東 1942: 42 頁)とされる犬骨が認められたことは、オホーツク文化が大陸的色彩の濃い文化であったことの論拠の一つとされた。また、戦前には、発掘担当者が出土した動物遺存体の鑑定を古生物学者や動物学者に依頼し、資料の提供を受けた専門家は自らの興味に従って資料の分析を行うことを常とした(金子 1992)。そのため、資料の所属時期や出土状況などの考古学的記述が省かれる代わりに、形質的特徴についての研究は急速に進展することとなった。

以上のような、戦前から続く形質的特徴についての研究の積み重ねによって、縄文時代のイヌは概して小型で、僅かな地方差がみられるものの、一系統に属することが明らかとなっている(金子 1978、西本 1983)。これらのイヌは、その大きさや形質的特徴から本州以南に生息するニホンオオカミ *Canis lupus hodophilax* から家畜化されたものではなく、すでに「イヌ」化した個体が他地域から持ち込まれたものとみられている(太田 1980)。第2節で見たように、北海道においても、縄文時代に属するイヌの大半は、長谷部言人氏(1952)の区分による小級、中小級の範囲におさまり、北海道やサハリンに生息するエゾオオカミ *Canis lupus hattai* との形態差も大きいため、それらを家畜化したものではなく、本州以南と同系統のイヌが持ち込まれたものとみられている(北海道八雲町教育委員会 1992)。

以上の形質的特徴から、イヌは、北海道とサハリンに出現した当初からすでに飼養されていたとみなすことができ、第2章で示した人間との相互関係(表3)においては、複数世代にわたる所有意識があり、かつ生存状態での拘束を伴うII-b段階に位置づけられることが明らかである。

本州では、弥生時代に、一部地域でイヌの大型化や(金子 1980、宮崎 1982、1984)、大陸側からの影響を示唆する形質的特徴(茂原・松井 1995)が認められているが、全体的には縄文時代のイヌの特徴を色濃く残しているとされる(金子 1980、茂原 1991)。続縄文時代においても、縄文時代と同様に、小型のイヌを主体とする。ただし、この時期には、前節で概観したとおり、イヌを多量に出土する遺跡が礼文島や利尻島、釧路市で出現しており、それらの遺跡から出土した資料の中には、肉眼的観察からも、また、頭蓋骨の計測データに基づいた多変量解析の結果(図22)からも、縄文時代や弥生時代のイヌとは明らかに異なる形質的特徴や(内山・松村 1997)、大型犬の含まれること(北海道釧路市埋蔵文化調査センター1999)が明らかとなっている。これらのイヌの中には、サイズが大きく、顔

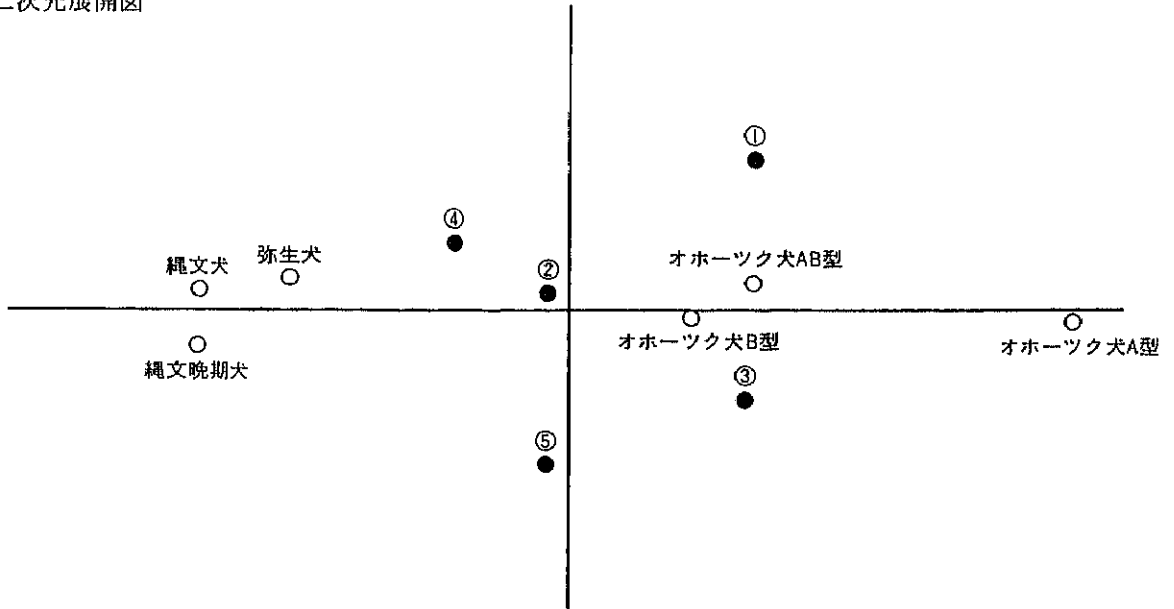
幅が広く、後続するオホーツク文化期に属するイヌとの類似性の高い個体が含まれることが明らかであった（内山・松村 1997）。

オホーツク文化の遺跡に多くの犬骨が伴うことは、同文化研究の黎明期の頃からすでに知られており、その形質的特徴についての研究は、1933年に阿部余四男氏によって出された「樺太北貝塚の犬に就いて」という論文をもって始まる。この中で阿部氏は、イヌの下顎骨 3 点について詳細な骨学的特徴を述べ、うち 2 点を歯の状態から家畜化された畜犬、1 点をシベリヤマイヌと報告している。斎藤弘氏（1938）は千島列島北東端に位置する占守島の堅穴から出土した犬骨と、サハリンの東多来加貝塚（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）出土の犬骨について分析を行い、頭蓋骨の構造と大きさによって、A、B、C、D、E 型の 5 タイプに分類した。斎藤氏はこのうちの 2 つないし 3 つの型が原始的型であって、その他は原始的型が混雑した結果生じた型であるとしている。このうち、占守島の堅穴から出土した犬骨はきわめて大きく、東シベリアもしくはカムチャッカから渡来してきた犬種ではないかと推測されている。また、東多来加貝塚（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）から出土した犬骨もその形状が明らかに北海道の史前犬やアイヌ犬（北海道犬）とは異なっていることから、北海道から北上したものではないとみなされた。なお、北海道の史前犬の中には、サハリンから出土したイヌと同じような形質的特徴を有するものがあるため、斎藤氏はこれをサハリンから影響を受けたものであると述べた。

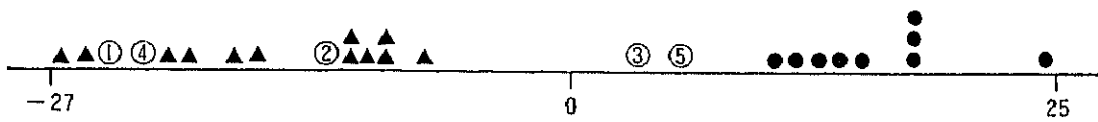
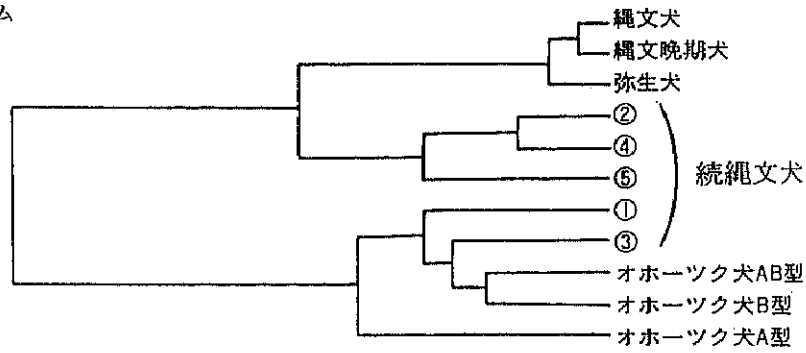
高橋多蔵氏（1940a～b）はサハリンの遺跡（鈴谷北貝塚（ススヤ遺跡）、鈴谷南貝塚（ソロビョーフカ遺跡）、荒栗遺跡、近泊遺跡、富内遺跡、柴浜遺跡（スタロドブスコエ遺跡）、東多来加貝塚（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）、本斗遺跡、吐鯤保遺跡、遠節澤遺跡、南名好遺跡（シェブニノ遺跡））から出土した犬骨（頭蓋骨・下顎骨）を分析し、第 1、第 2、第 3 型の 3 タイプに分類した。第 1 型は比較的小型で、東多来加貝塚（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）から割合多く出土したが、鈴谷北貝塚（ススヤ遺跡）、本斗遺跡からは僅かに出土したに過ぎず、サハリンではあまり多く認められない型である。長谷部氏（1936）によると、日本の石器時代の遺跡から出土する犬骨もこれに類するものであり、アムール河下流域からサハリン中部にかけて居住するニブフは、この犬種を原形のまま保持しているという。第 2 型は中型で、東多来加貝塚（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）から割合多く出土した。これに類する犬骨は、森為三氏（1929）の論考によると、朝鮮半島の石器時代の貝塚より出土しているという。なお、アイヌ犬（北海道犬）もこれに類するといわれる（高橋 1940c）。第 3 型は大型で、ストップ（鼻筋から額にかけてのくぼみ）が明瞭に認められる。サハリンの遺跡において、もっとも多く出土する型である。特に、鈴谷北貝塚（ススヤ遺跡）においてはほとんどがこの型に属し、東多来加貝塚（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）でも大多数はこの型であるという。オホーツク文化の中でも古い時代に属する鈴谷貝塚（ススヤ遺跡）（註 10）からこの型のイヌが多量に出土していることから、高橋氏は、第 3 型のイヌがもっとも古くサハリンに渡来したのではないかと推測している。

直良氏（1957）はオホーツク海沿岸遺跡から出土したイヌの下顎骨を分析し、A 型、B

a. 二次元展開図



b. デンドログラム



判別得点

記号凡例

- ① 続縄文犬
- ▲ 縄文犬
- オホーツク犬 A 型

図 22 イヌの頭蓋骨の計測値を用いた多変量解析結果 (内山・松村 1997)



型の2つのタイプに分類している。このA型、B型のイヌは高橋氏による第3型、第2型に対応するが、直良氏の分析した資料の中には高橋による第1型は確認できなかったという。直良氏によるA型のイヌは、北海道のオホーツク海沿岸の遺跡からは稀にしか発見されず、A型に類する若干小型のイヌが網走市モヨロ貝塚などで得られている。このことから直良氏は、A型のイヌの故郷はもともとサハリンにあり、それが北海道に南下したという仮説を立てている。同様の指摘は、前述したように、すでに齋藤氏（1938）によっても述べられている。

礼文町香深井1遺跡から出土した犬骨の分析を行った西本豊弘氏（1981）は、主として頭蓋骨吻部の形態からA型（図23）、B型（図24）の2タイプに分類し、中間的な形質の特徴を持つものをAB型と区別している。西本氏のいうA型のイヌは、直良氏のA型とB型の間中型といえるものであり、高橋氏の第2型と第3型の間中型に近いものであるという。B型のイヌは、直良氏のB型、高橋氏の第1型に近いものであり（註11）、現代のアイヌ犬（北海道）に近いという。この型のイヌは、ユーラシア大陸の北部で広く飼養されていた種であり、北海道や本州の縄文貝塚犬や、現代の雑種犬にも見られることから、年代的にも地域的にもかなり広い分布を示すと述べられている。

以上のように、オホーツク文化期に属するイヌの形質的特徴についての研究は数多いが、このうち、高橋氏（1940a～d）、直良氏（1957）、西本氏（1981）によって設定された各種型の対応関係を整理すると、以下のようになる。

表8 オホーツク文化期に属するイヌの型分類

高橋氏 (1940a～d)	直良氏 (1957)	西本氏 (1981)
第1型	=====	B型
第2型	=====	? (B型)
(第2・3中間型)	=====	A型
第3型	=====	A型

この表からも明らかなように、各研究者による型分類には、明確な対応関係を見出すことが困難な部分があり、また、分類の基礎とされた資料の収蔵先が不明な資料も多い。

## (2) 頭蓋骨の計測値に基づいた検討

縄文時代から弥生時代、続縄文時代、オホーツク文化期に属するイヌについては、頭蓋骨の計測値に基づいた多変量解析による比較を、すでに筆者ら（内山・松村1997）が行っている（図22）。ただし、この論考では、サハリンから出土した資料を用いていないため、ここでは、サハリンの資料やその後報告された日本側の資料を追加した上で、形質的特徴についての検討を試みることとする。

なお、縄文時代からつづくイヌの系統と、続縄文時代に一部遺跡で出現しオホーツク文

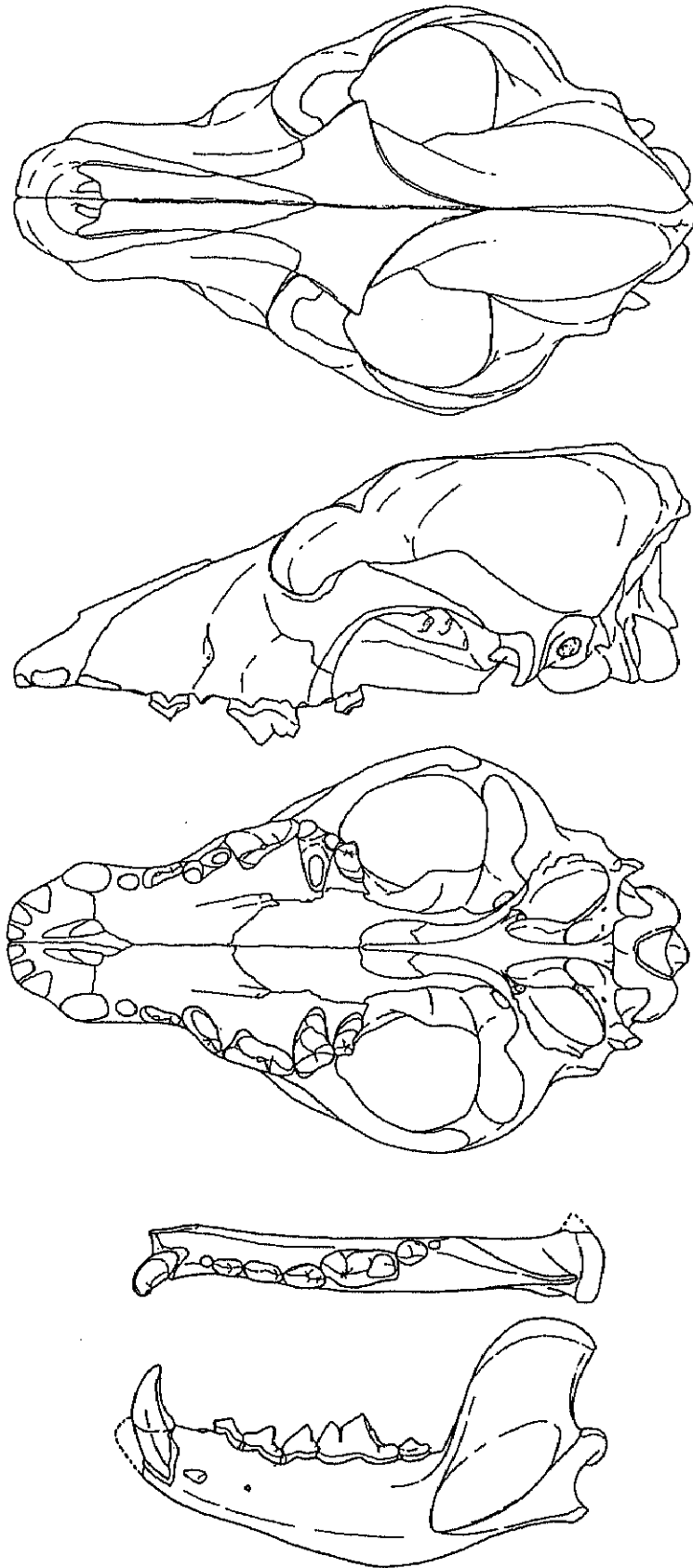


図23 オホーツク犬A型 (大場・大井編 1981) 縮尺 1/2

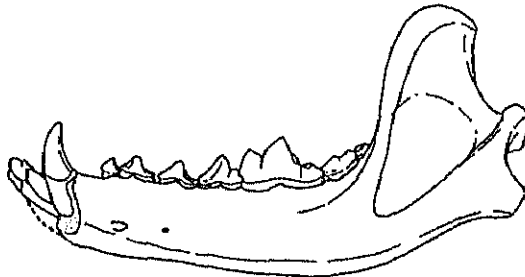
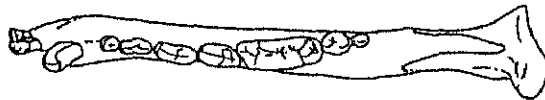
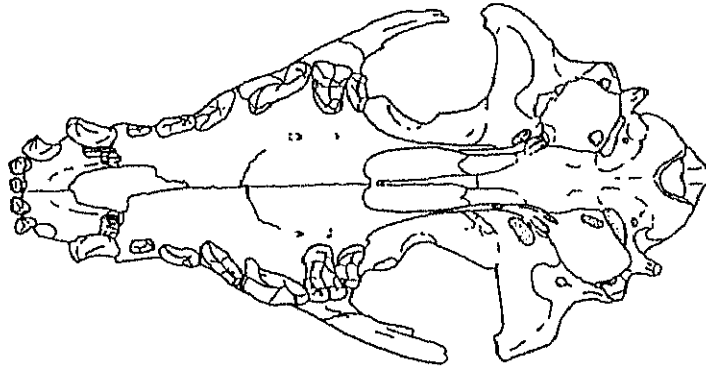
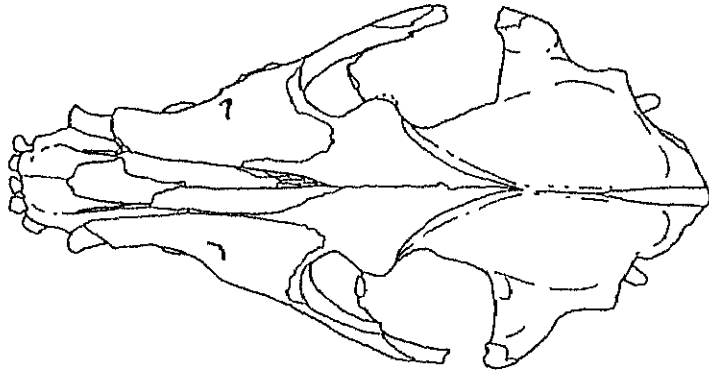


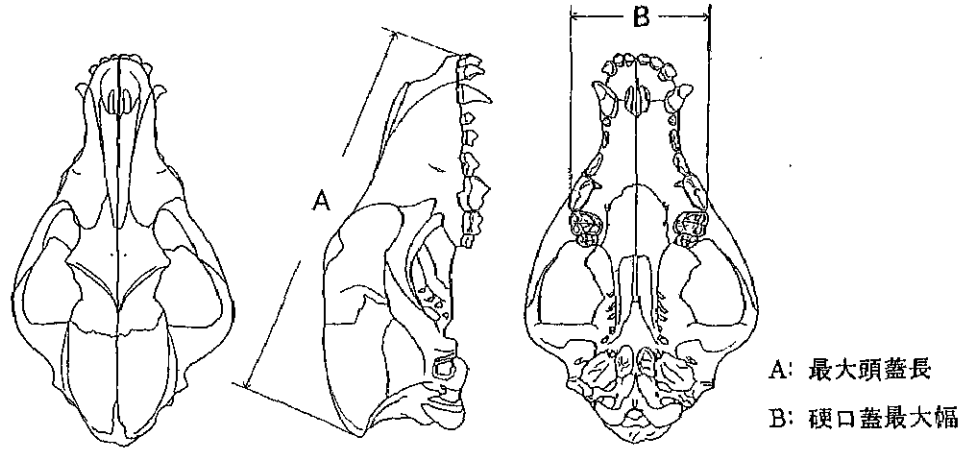
図 24 オホーツク犬 B 型 (大場・大井編 1981) 縮尺 1/2

化期に継承されるイヌの系統とは、サイズとシェイプの双方で明瞭な差異の認められることがすでに明らかである（内山・松村 1997）。そのため、ここでは、斉藤弘吉氏（1963）に従って計測した頭蓋骨の最大頭蓋長と硬口蓋最大幅（図 25）の計測値を用いて分析を行うこととする。ここで取り上げた資料は、直接観察・計測することが可能であったもの、もしくは詳細な報告がなされているものである。用いた遺跡の所在と資料の計測値については章末の図 26 と表 9～13 に示した。

縄文時代と弥生時代のイヌは、大きさや形質的特徴において類似性が高いとされるため（金子 1980、茂原 1991）、日本各地で出土している資料をそれぞれまとめた。続縄文時代のイヌは、出土総数が少ない上に、系統の異なる資料の含まれることが明らかであるため（内山・松村 1997）、個体ごとに取り扱うこととした。また、サハリン中部のザーパトナヤ 10 タイプ土器期のうち、鈴谷期の後半期から十和田期の初期にかけての編年位置が想定されているⅢ群土器（木山他 2003）に伴うイヌについても、例数が少ないため、個体ごとに取り扱った。オホーツク文化期のイヌについては、前述したように、型分類をめぐって研究者間で意見の一致をみていないため、礼文町香深井 1 遺跡や同浜中 2 遺跡、枝幸町ホロベツ砂丘遺跡、根室市弁天島遺跡、プロムイスロヴォエ 2 遺跡については、西本氏（1981）による分類にしたがって、A 型、B 型とその中間型（AB 型）に分けた。高橋氏（1940a～d）によって分類された鈴谷北貝塚（ススヤ遺跡）、吐鯤保遺跡、東多来加貝塚（プロムイスロヴォエ 2 遺跡）については、同氏の分類にのっとり、第 1 型、第 2 型、第 3 型に分けた。また、鈴谷貝塚（ススヤ遺跡）から出土した資料については、遺跡で一括することとした。なお、オホーツク文化期に属する資料のうち、鈴谷貝塚（ススヤ遺跡）から出土した資料以外については、型が不明であるものや、A～AB 型のように複数タイプにまたがるものについては検討対象から省いた。さらに、オホーツク文化に併行する時期にオホーツク海北岸で海獣狩猟を盛んに行った文化として知られるトカレフ文化に属するイヌ（佐藤 1996）についても、1 例ではあるが、参考までに検討に加えることとした。なお、茂原信生氏（1991 など）は、出土犬骨を雄と雌とに分けた上で形質的特徴の検討を試みているが、北海道やサハリンの資料で雌雄の区分がなされている例はほとんどないため、ここでは、一括して取り扱った。

図 25 は、最大頭蓋長と硬口蓋最大幅の計測値を示したものである。この図から明らかのように、縄文時代と弥生時代のイヌ（1、2）は、顔の長さ（最大頭蓋長）と幅（硬口蓋最大幅）がともに小さい値を示す。一方、オホーツク文化期のイヌ（18～24）は、ユーラシア大陸に広く分布するといわれる比較的小型の西本氏による B 型（22）や高橋氏による第 1 型（22）を含めても概して大きく、その中でも、高橋氏による第 3 型（24）の大きさと顔幅の広さは際立っていた。

続縄文時代前半期に属する資料のうち、本州に近い恵山文化圏にある有珠 10 遺跡から出土した資料（3）は、最大頭蓋長と硬口蓋最大幅がともにきわめて小さい値を示した。また、南有珠 6 遺跡から出土した資料（4）は、最大頭蓋長がオホーツク文化期の小型犬に匹敵す



A: 最大頭蓋長  
B: 硬口蓋最大幅

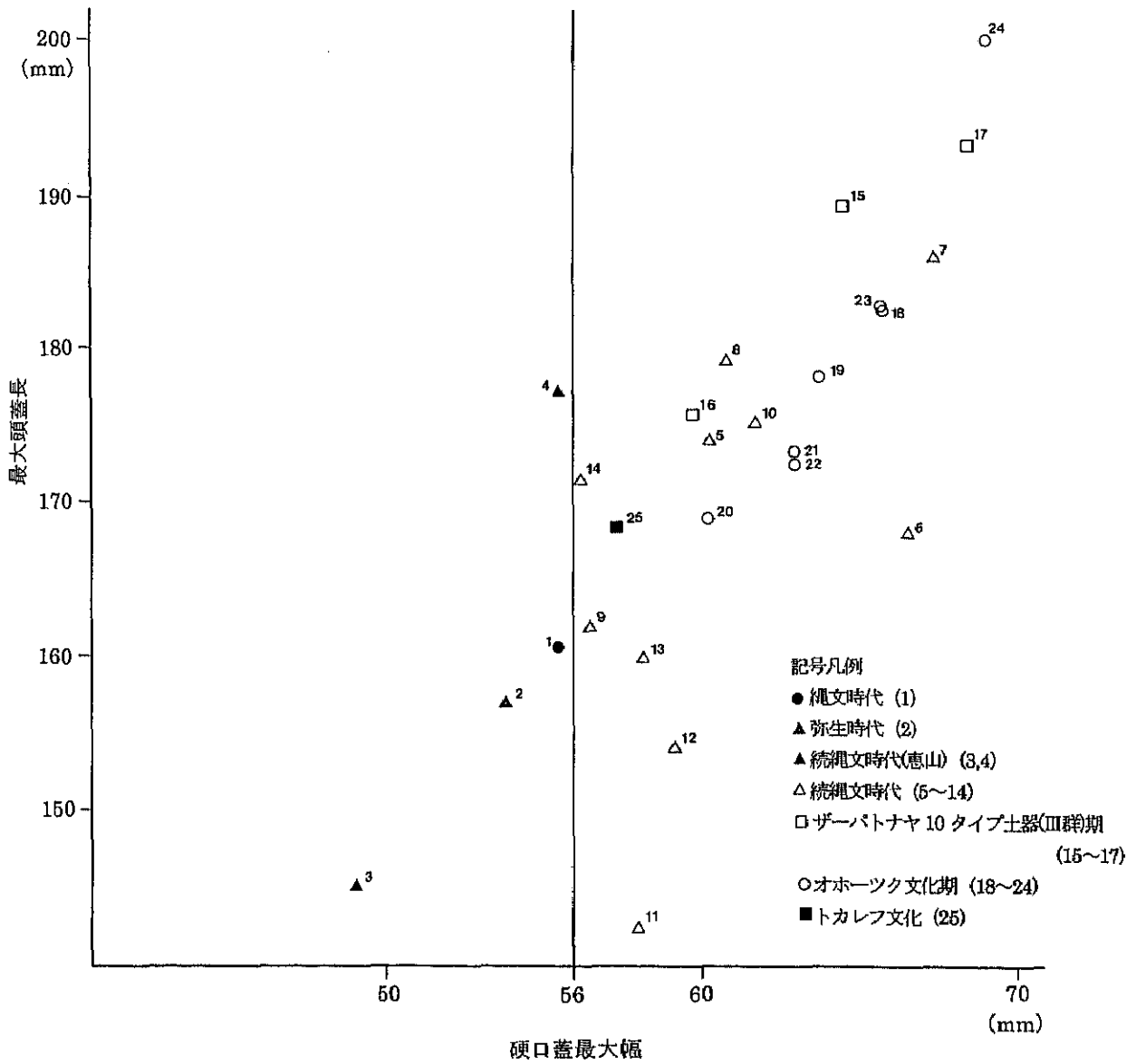


図25 頭蓋骨の計測値に基づく形質的特徴の時代的傾向

る値を示したが、顔幅は狭く、形質的には縄文時代のイヌに類することが明らかであった。同じ続縄文時代前半期に属する資料のうち、礼文町浜中 2 遺跡と利尻町種屯内遺跡から出土した資料（5～14）では、最大頭蓋長の変異幅の大きいことが明らかであった。ただし、これらの多くは顔幅が広く、最大頭蓋長の大小に関わらず、いずれも 56mm を超える値を示した。中には、11 のように、最大頭蓋長が 142.6mm と小さいにも関わらず、硬口蓋最大幅が 58.0mm の資料もみられるなど、縄文時代のイヌとは異なる形質的特徴を具えていることが明らかであった。このような顔幅の広いイヌは、オホーツク文化期のイヌの分類では西本氏による A 型に含まれるものである。また、ザーパトナヤ 10 タイプ土器のⅢ群に伴う資料（15～17）は、3 例ともにオホーツク文化期のイヌに類する形質的特徴を具え、このうちの 1 例（17）は、オホーツク文化期の中でもっとも大きな高橋氏による第 3 型（24）に近い値を示した。トカレフ文化のイヌは、オホーツク文化期のイヌに比べて、最大頭蓋長、硬口蓋最大幅ともにやや小さい値を示した。この文化に属する資料の報告例は少ないため、今後の資料増加が望まれる。

以上のように、サハリンでの出土資料を新たに加えて分析した結果、かつて筆者らが指摘したように（内山・松村 1997）、サハリンと北海道では、続縄文時代を画期として、イヌの形質に大きな変化が認められることが明らかとなった。この時期に、前時代とは異なるイヌが道北部、道東部という道内の一部地域で突如として見出された背景については、新たな形質的特徴を具えたイヌが他地域から移入されたか、もしくはそれらと在地系のイヌとが交雑した可能性が考えられる。このような変化は、続縄文文化圏内の一部地域に限って認められるものであり、同文化圏内の道央部や道南部、弥生文化圏内の東日本では、これに類する形質的特徴を具えたイヌの報告例はみられない（註 12）。そのため、続縄文時代への移行期から前半期にかけて、礼文島や利尻島、釧路市で新たに見出された形質的特徴の系譜は道内や南方に辿れるものではなく、より北方の地域との関わりの中で出現した可能性が高いことを指摘しておく。

#### 第 4 節 利用内容の時期的変遷と地域差

##### （1）利用内容の画期と周辺文化との関わり

海獣狩猟文化が成立する以前の縄文時代の北海道では、すでにイヌが飼養されていたことが、前節で示した形質的特徴からも明らかとなっている。当該期のイヌの出土状況には、埋葬例と散乱例が確認されており、後者には、食料にされたとみられる例や、儀礼に供せられたとみられる例、製品の素材とされた例などが含まれる。これらの事例はいずれも例数が限られており、イヌの利用内容や価値が斉一化していなかったことが分かる。このうち、埋葬されたイヌについては、生前に重要な役割を担っていたために、食料資源や道具素材としての二次的な利用がなされなかったものと推測し得る。なお、第 2 章で示した表 2

からも明らかなように、イヌの生前の用途には、使役（狩猟の補助/見張り、運搬）や愛玩があるが、狩猟採集社会で純粋な愛玩動物が存在することは稀であるため、これらのイヌは使役用であったものとみなせる。ただし、運搬用（橇の牽引）としての役割を想定できるほど 1 遺跡あたりの出土量は多くないため、これらは狩猟の際の補助や見張り役としての役割を担っていた可能性が高い。また、イヌの乳歯が人間の乳歯とともに多く出土した泊村茶津貝塚事例（北海道文化財研究所 1990）については、イヌに特別な価値を置いていたことの証左とみなすことができ、ここで出土するイヌが生前にも何らかの特別な用途を担っていた可能性が考えられる。この他の散乱例の大半は、食料資源などとして利用されたものとみられるが、生前に別の役割を担っていたかどうかについては定かでない。しかし、最終的な利用形態からすると、儀礼に供されたものも含めて、イヌが他の動物と区別された事例が少ないことは明らかであり、当時の人々の動物観の中では、飼養動物であるイヌと野生動物とがそれほど明瞭には区別されていなかったことがうかがえる。また、縄文時代を通じて、道具素材としてのイヌの遺存体の利用はほとんど認められておらず、意匠される対象にもならなかったことは、第 2 節で概観したとおりである。

つづく続縄文時代においても、イヌの出土量は、後述する一部の遺跡を除いて、少量に限られるのが一般的である。この時期のイヌの出土状況は、縄文時代とは異なり、全て散乱例で占められるが、1 遺跡あたりの出土量の少なさや道具素材としての遺存体の利用程度の低さ、意匠の対象外である点などから、基本的には前時代と類した利用内容や文化内での位置づけがなされていたものとみなせる。

続縄文時代への移行期から前半期にかけては、一部地域に限って、イヌの遺存体を多量に出土する遺跡が複数例確認されている。これらの遺跡は、道北端部の礼文島と利尻島、道東部の釧路市に位置しており（図 27）、両地域の間には、貝塚遺跡の検出例が少なく動物利用の様相が不明な地域が広がっている。この時期は北海道が地域分化する時期にあたり、道北部と道東部では、土器（福田 1999）をはじめとする多くの文化要素において差異が認められている。ただし、イヌ利用に関しては、

- ① 獣類の中で主体的もしくは多量に出土する
- ② 散乱した出土状況を示す
- ③ 若い個体の占める割合が高く、成獣の中に老獣が含まれない

といった特徴が共通して認められ、加えて、礼文島や利尻島に所在する遺跡では、

- ④ 切痕を留める資料が含まれる

ことも報告されている。

以上の特徴から、イヌはこれらの遺跡では割合多く飼養され、成獣に達しない段階か遅くとも生後 2 年以内のうちに殺され、解体を伴う用途、すなわち食料資源として利用されたものとみられる。なお、④の切痕は、表 14 に示したように、頭蓋骨や下顎骨の骨体部（頬側）、中足骨などの肉量の少ない部分に観察される例が多い（図 28～30）。そのため、この傷は肉採取によるものではなく、毛皮を採取する際に付いたものであるとみなすことがで

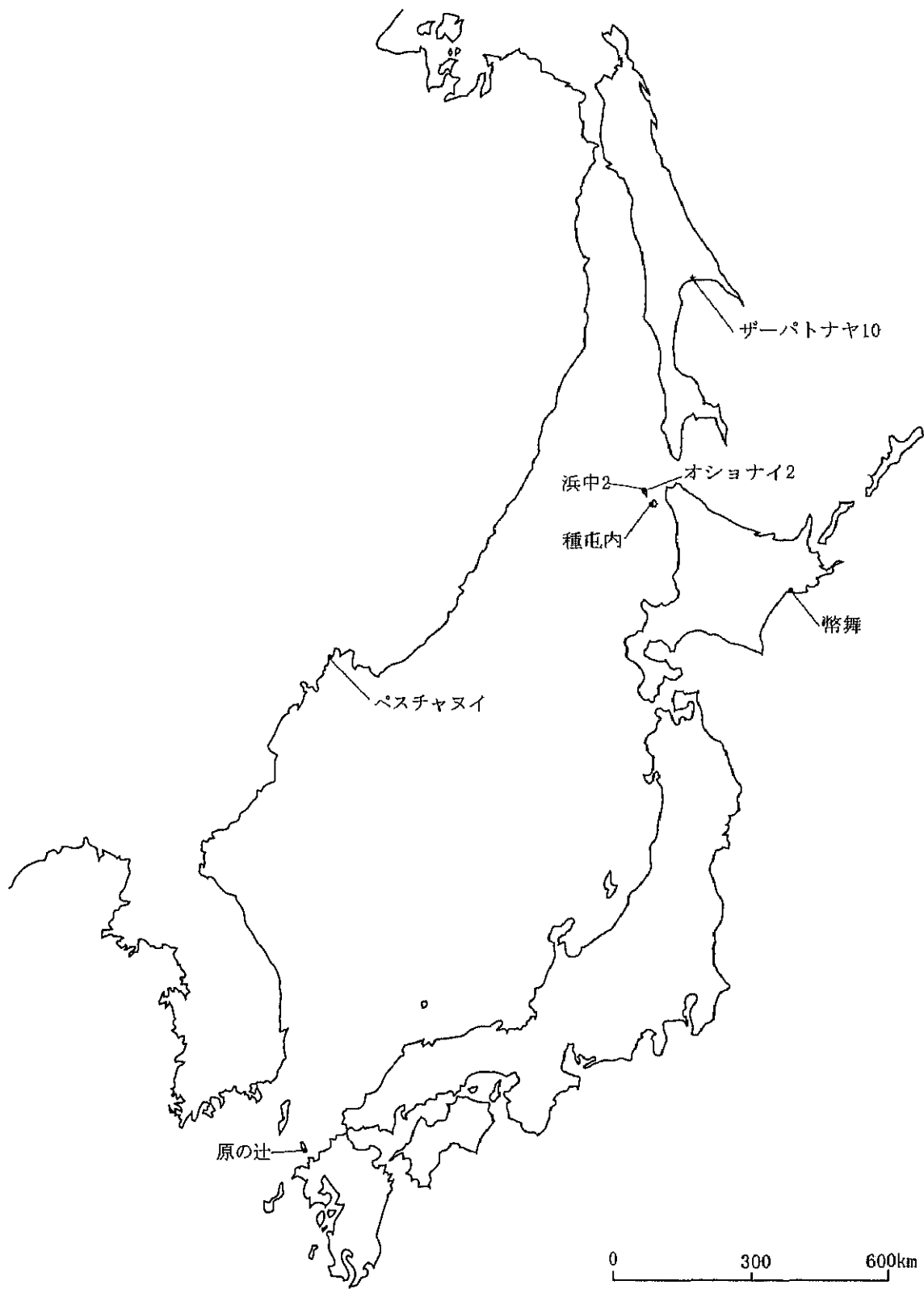


図 27 イヌの遺存体を多量に出土する遺跡 (統縄文時代とその併行期)



表14 イヌの遺存体に観察された傷(1) 続縄文時代

遺跡名	遺物番号 出土区・層	部位	傷の内容	推定死亡年齢*	備考	図番号	
浜中2 (1990~1992)	4-1	頭蓋骨	前頭骨(左右)に傷	亜成獣(生後5~6ヶ月)		図28-1	
	4-20	頭蓋骨	前頭骨(左右)に傷	亜成獣			
	4-23	頭蓋骨	前頭骨(左右)に傷	亜成獣(生後4~5ヶ月)			
	(1994~1997)	7248	頭蓋骨	前頭骨(右)に傷	幼獣		2
		10206	頭蓋骨	前頭骨(左)に傷 前頭骨(右)に孔?	亜成獣		
		479	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	亜成獣(生後4ヶ月)		3
		7251	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	亜成獣(生後4ヶ月)		
		7711	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷、下顎枝の 切り取り	亜成獣		
		7723	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	幼獣(生後2ヶ月)	同一個体	5
			下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	幼獣(生後2ヶ月)		6
		9078	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	亜成獣(生後5ヶ月)		4
	6583	腰椎	下方に傷	成獣		7	
オションナイ2	A6 I	頭蓋骨	上顎骨・鼻骨(左右)に傷	亜成獣(生後5~6ヶ月)	同一個体	図29-8	
		下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	亜成獣(生後5~6ヶ月)			
		下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	亜成獣(生後5~6ヶ月)			
	B6 I	頸椎	前方(頭蓋との接点)に傷	成獣			
	F10 I	中足骨(左) II~IV 中足骨(右) II~IV	近位部上面に傷 近位部上面に傷	成獣 成獣	同一個体	10	
種屯内	E1 I IV	脛骨(右)	下部に傷	成獣			
	92	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷?	亜成獣(生後4~5ヶ月)	同一個体		
		下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷?	亜成獣(生後4~5ヶ月)			
	139	頭蓋骨	前頭骨(右)・頬骨(左)に傷	成獣		図30-11	
	143-144	頭蓋骨	前頭骨・頬骨(左)に傷?	亜成獣(生後5~6ヶ月)			

表15 イヌの遺存体に観察された傷(2) ザーパトナヤ10タイプ土器期

遺跡名	遺物番号 出土区・層	部位	傷の内容	推定死亡年齢*	備考	図番号
ザーパトナヤ10	2b 上部貝層	頭蓋骨	上顎骨(右)に傷?	成獣		
	2b 上部貝層	軸椎	上部後方に傷	成獣		
	4b 上部貝層	上腕骨(左)	下部に傷	成獣		
	3b 上部貝層	橈骨(左)	上部に傷?	成獣		
	1b	橈骨(左)	上部に傷	成獣		図31-1
ザーパドナヤ11	231-315	上顎骨(左)	上顎骨(左)に傷	幼獣(生後3ヶ月)		
		上顎骨(右)	上顎骨(右)に傷	幼獣(生後3ヶ月)		
		下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	幼獣(生後3ヶ月)		
	316-401	下顎骨(右)	骨体部下方が削られる	幼獣(生後3ヶ月)		
	1-76	上腕骨(右)	下部に傷	成獣		
	77-170	上腕骨(右)	下部に傷	成獣		
	389	上腕骨(右)	下部に傷	成獣		
	316-401	尺骨(左)	中間部から縦位に削られる	成獣		
	398-419	尺骨(左)	上部に傷	亜成獣		2
231-315	大腿骨(右)	中間部に傷	亜成獣			
ザーパトナヤ12	3-12 91	頭蓋骨	上顎骨・鼻骨(右)に傷	成獣		

\*上顎骨、下顎骨は歯牙の萌出・交換状況に基づいて推定を行い、その他の部位では関節の骨化状況で推定している。両者の年齢区分は一致しない。

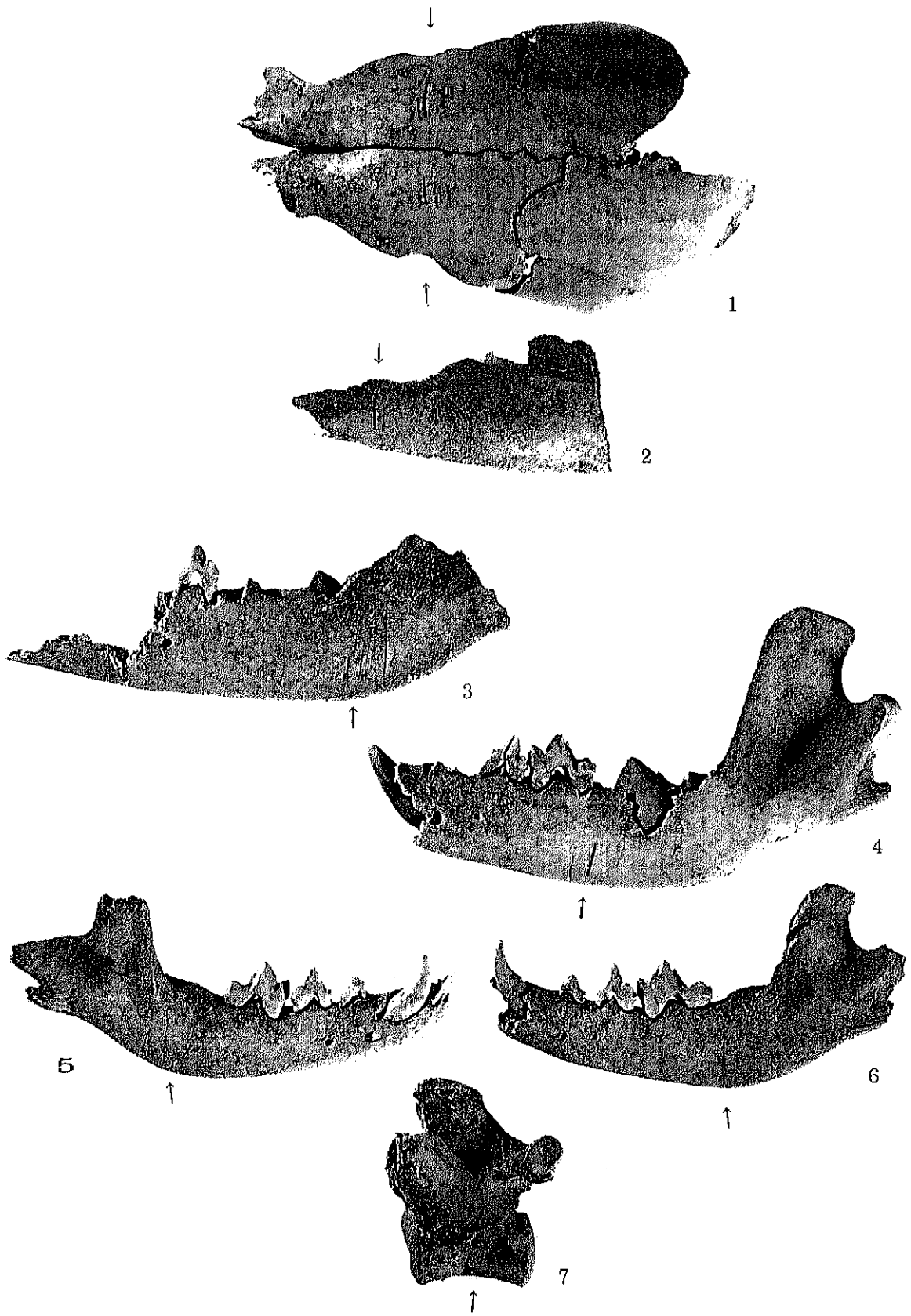
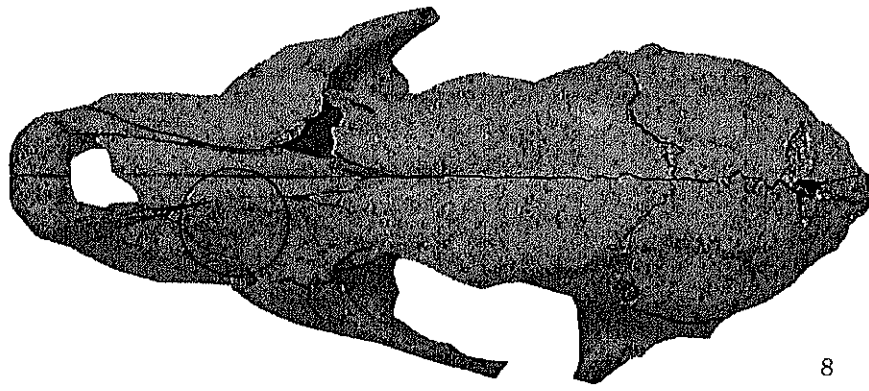
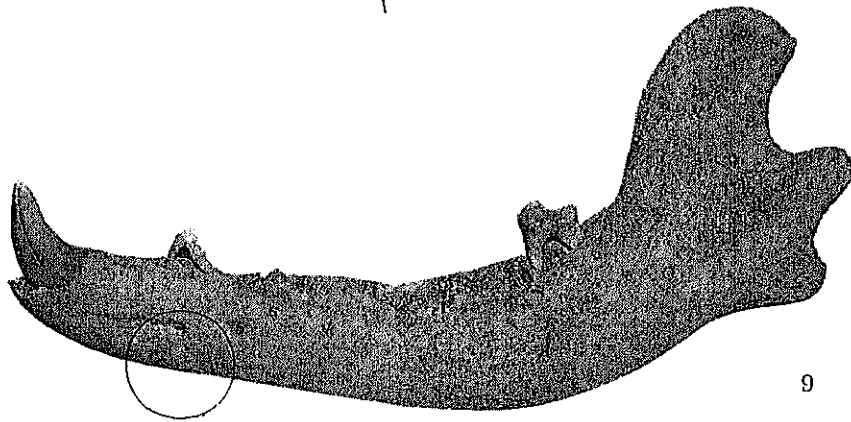


図 28 イヌの遺存体に観察された傷(1) 続縄文時代

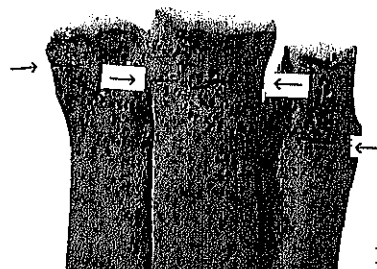
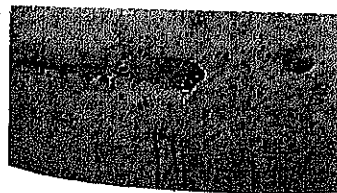
1,2:頭蓋骨 3~6:下顎骨 7:腰椎 (縮尺 1/2)



8



9



10

図 29 イヌの遺存体に観察された傷(2) 続縄文時代

8:頭蓋骨 9:下顎骨 10:中足骨Ⅱ～Ⅳ近位部(右) (8:縮尺 3/5、9:9/10、他不明)

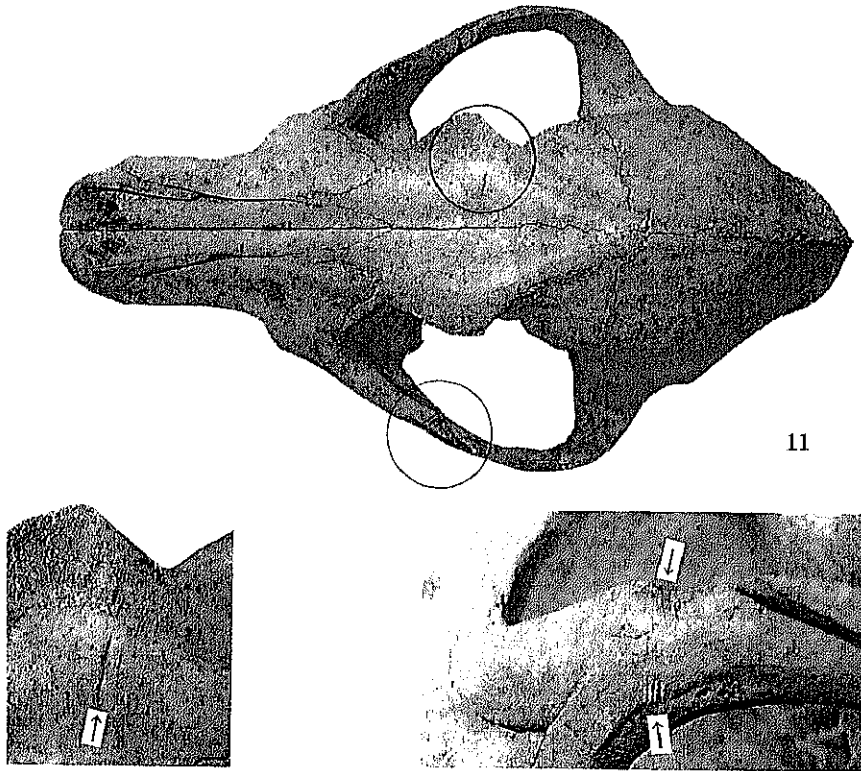


図 30 イヌの遺存体に観察された傷(3) 続縄文時代  
11:頭蓋骨 (縮尺 3/5)

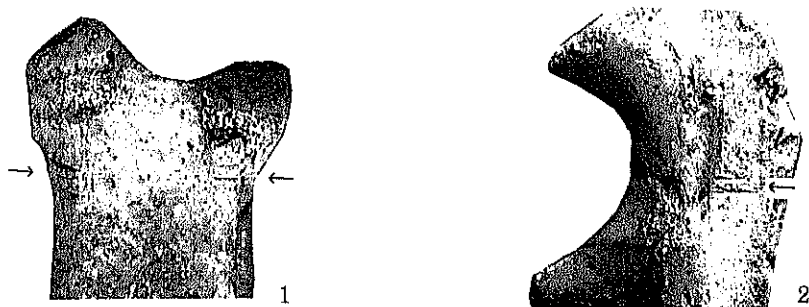


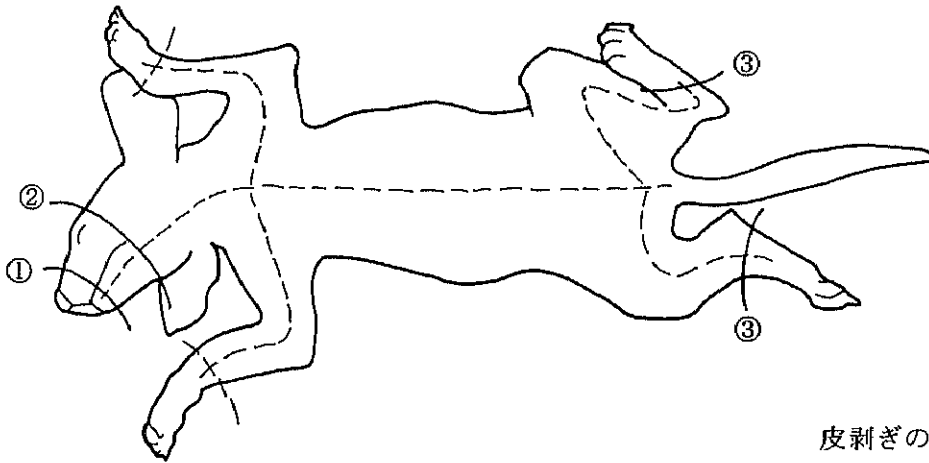
図 31 イヌの遺存体に観察された傷(4) ザーパトナヤ 10 タイプ土器期  
1: 橈骨 2: 尺骨 (縮尺不明)

きる。さらに、②の出土状況では、部位ごとのまとまりが複数例確認されていることから（図 12、13）、毛皮が採取された後、各部位に切り分けられたことが見て取れる。クレイノヴィチ氏（Крейнович1930）によれば、アムール河下流域からサハリンに居住するニブフは、イヌを絞殺した後、仰向けにして、まず、下唇から肛門にかけて切れ目を入れ、その後、手足を縦方向に切開して皮を剥ぎ、内臓を取り出し、各部位に切り分けるという。この例を参考にして、イヌの出土状況や傷の内容を検討すれば、続縄文時代のイヌは、おそらく皮を傷つけない方法で屠殺された後、まず全身の毛皮が鼻先や手足先まで最大限に剥がれ、その後、各部位に切り分けられるという、比較的規則性の高い解体方法が採られていたものと推測される（図 32）。なお、種屯内遺跡と幣舞遺跡では、頭部の出土量に対して四肢が少ない傾向にあるが、当時のイヌの利用目的が肉や毛皮の採取にあったことからすれば、頭部は不要な部位として遺棄されたものであり、四肢骨は枝肉として肉とともにその場から持ち去られた可能性が考えられる。さらに、③の若い個体に偏るという年齢構成は、イヌが若い段階で利用される傾向にあったことを示唆するだけでなく、生前に狩猟の補助や橇の牽引などの訓練を要するような用途を担っていなかったことの傍証ともなる。すなわち、これらのイヌは、肉や毛皮の採取という明確かつ実用的な意図によって生業体系に組み込まれたことが明白であり、ここに生産経済の萌芽という画期が見出し得るとともに、生きた動物を集落内に確保することによって、生活や社会に少なからぬ変容が促されたことが想像される。

以上のようなイヌの利用内容は、北海道では前時代にはみられなかったものであり、前節で論じた新たな形質的特徴を具えたイヌの出現とも合わせて、内的に発生したものではなく、周辺地域からの影響によって新たに導入されるに至った可能性が考えられる。南に接する弥生文化圏内で類似したイヌ利用が認められているのは、註 12 に示したように、直線距離で 1,600km 程も離れた老岐島に所在する原の辻遺跡（長崎県教育委員会 1995）（図 27）のみである。ただし、この遺跡から出土したイヌは、弥生時代中期から後期に属するものとみられ、北海道で出土したイヌに比べて時代が下る。また、原の辻遺跡から出土した石包丁や石鎌、鉄製の鎌や鋤先からは、その担い手が半農半漁集団であったことがうかがえ、当該期の北海道とは文化的差異の大きいことが明らかである。当該期における北海道と列島南部との関わりについては、以前から南海産の貝製品を介した交流のあったことが知られ（大島 1989）、近年では、列島南部の漁撈民が北海道へ移入したとする見解も出されている（山浦 1999、西本編 2000）。しかし、狩猟・漁撈具である銛頭や骨篋、魚形石器に見る形態的差異や空間的隔たりは大きく（前田 2000、乾 2001、高橋 2004）、前述した文化的差異の大きさからしても、現段階でそのような想定は認め難いといえよう（内山 2003a）。

一方、より北方のサハリン中部では、続縄文時代前半期に併行するとみられているザーパトナヤ 10 タイプ土器（Ⅱ群）に伴って、上記の①～④の特徴を全て具えたイヌ利用が確認されている（表 15、図 27、31）。この時期には、サハリン中部で、北海道産とされる黒曜石も得られており（興水・野村 1990）、また、例数は限られるが、ザーパトナヤ 10 タイプ

絞殺などの毛皮を傷つけない方法で屠殺

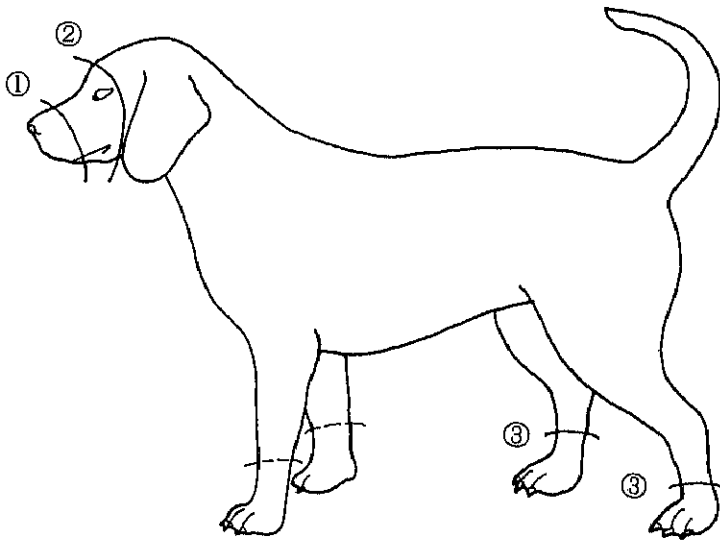


皮剥ぎの際の傷

①図 29-8,9 など

②図 30-11 など

③図 29-10 など



食料資源  
枝肉 (各部位)



道具素材  
毛皮



不要部位  
頭・尾など

図 32 傷や民族例に基づいて推測されたイヌの解体方法 (続縄文時代)

土器（Ⅱ群）がサハリン南部で出土する例もあることから（木村 1989、Федорчук1998）、サハリン中部、同南部、北海道が何らかの関わりを有していたことが明らかである。このことから、サハリン中部や礼文島、利尻島、釧路市で近似した時期に新たに見出されたイヌ利用は、各地域で自発的・偶発的に出現したものではなく、関連性を持っていた可能性が高い。

なお、サハリン中部では、続縄文時代（アニワ文化期）の初頭に編年づけられているユージナヤⅡ段階の土器が出土しており（Федорчук1995）、ザーパトナヤ 10 タイプ土器期はこれに後続する編年位置が想定されている（木山他 2003）（表 1）。この編年観に基づくと、サハリン中部、礼文島、利尻島、釧路市で認められたイヌ利用のうち、もっとも古い事例は、利尻町の種屯内遺跡と、釧路市幣舞遺跡となる。ただし、前述したように、北海道側では、形質的特徴と利用内容の双方で、前時代に系統を辿ることができないため、現段階で、その起源地を北海道側に求めることは困難である。そのため、新たな形質的特徴を具えたイヌと肉や毛皮の採取を目的としたイヌ利用の出現過程の復元には、この時期に先行するサハリンでのイヌ利用の様相を探ることが不可欠といえよう。

サハリン中部のザーパトナヤ遺跡群でまとまって確認されたザーパトナヤ 10 タイプ土器は、サハリン中部以北の東海岸に主要な分布域を持ち（野村 1990、1992、Федорчук1998）、土器や遺跡立地の類似性からアムール河河口部との強い関連性が指摘されている（デリュージン 1994、木山他 2003）。アムール河河口部でのイヌ利用の様相は不明だが、イヌを食料資源などとして多量に利用する事例は、沿海州に所在する初期鉄器時代のペスチャヌイ遺跡でも確認されている（Ермолова1963）。また、この時期には、鉄器や銀器が北方ルートで道東部へもたらされたことも指摘されており（河野 1973、北海道目梨郡羅臼町教育委員会 1981、藤本 1986、菊池 1992、本間 1995）、巨視的に見て大陸側を起源とする新たな経済体系が、金属器などとともに、北方ルートと南方ルートで日本列島へ導入されるに至った可能性も想定できる（内山 2003a）。そして、このような北方地域との関係が顕著となった背景には、続縄文文化がサハリン南部にまで分布域を拡大したことや、本州以南との関わりが前時代に比べて薄れたこと、さらには、藤本強氏（1986）が「漢帝国の成立とその北方への進出」（263 頁）を挙げたように、大陸での情勢が複合的に関与した可能性が考えられる。なお、北海道における続縄文時代の開始年代によっては、これに影響を与えた大陸の情勢が藤本氏の指摘する事象とは異なってくる可能性もある。

サハリン中部と北海道との間に位置するサハリン南部は、現在までのところ、資料の不足からイヌ利用の様相が不明となっている。しかし、この時期にサハリン南部から道北部まで多くの文化要素を共有した一つの小地域圏を形成することからすれば（前田 1999、Василевский2002、木山 2003、2004）、この地域でも、同様のイヌ利用がなされていた可能性は高い。なお、この時期に新たに見出されたイヌ利用の内容は、オホーツク文化期のものと基本的に共通しているため、この時期を画期として、宗谷海峽域やサハリン中部では、肉や毛皮の採取を目的としたイヌ利用が継続して行われていく様子が見て取れる。

## (2) 利用内容の展開

イヌの遺存体は、動物遺存体を出土する遺跡の多くで確認されている。ただし、イヌの占める割合が高い遺跡はそれほど多いわけではなく、オホーツク文化期でこれに該当する遺跡は、サハリン中部のプロムイスロヴォエ 2 遺跡、サハリン南部のススヤ遺跡、道北端部の礼文町浜中 2 遺跡、同香深井 1 遺跡、同香深井 6 遺跡、利尻富士町役場遺跡、稚内市オンコロマナイ貝塚、道東部の根室市トーサムポロ遺跡、同弁天島遺跡のみである。サハリンでは、定量的な分析結果が提示されている遺跡が少ないため、その詳細については不明な部分が多いが、近年、筆者らがサハリン南部で行っている踏査や試掘調査では、江ノ浦期に属するリュトガ 3 遺跡や南貝塚期に属するカミサンノサワ遺跡のように、イヌの遺存体があまり見出されない遺跡も確認されている。また、北海道本島でもイヌの出土量は限られるのが一般的であるが、これは、当地域の動物遺存体の報告が動物儀礼の痕跡である骨塚資料を中心としているために、それにあまり関与しないイヌの出土割合が低く算出されることが要因とみられる。そのため、北海道本島については、食料残渣を含む包含層の調査によって、出土量や出土割合が増す可能性を留意する必要がある。ただし、包含層が調査されている遺跡でも、例えば枝幸町目梨泊遺跡（内山 2004）のようにイヌの出土がまったく認められない遺跡や、根室市オンネモト遺跡（金子 1974）のように出土量が限られた遺跡もあることから、礼文島や利尻島に所在する遺跡に比べれば、その出土割合は概して低い傾向にあるものとみなせよう。このように、遺跡ごとに出土割合が異なることは、イヌの利用程度が同文化内で斉一化されていなかったことを示唆する。

なお、オホーツク文化期に属するイヌについては、

- ①後述する埋葬犬例 1 例を除く全てが散乱した出土状況を示す
- ②年齢構成が比較的若い個体に偏る
- ③切痕を留める資料が含まれる

ことが確認されている。そのため、出土量の多寡に関わらず、当該期には、イヌが比較的若い段階で解体を伴う使途、すなわち食料資源として利用されていたものとみなされている（斎藤 1938、直良 1939、1957、1973）。なお、オホーツク文化期では、続縄文時代と同様に、③の切痕を留める資料が多く確認されている（表 16、17、図 33～35）。この中には、頭蓋骨や下顎骨の骨体部（頬側）のように、肉量の少ない部分に見出された例も多いことから、肉とともに、毛皮の採取が合わせて行われていたことが明らかである。また、①の出土状況では、部位ごとにまとまる例が多いため、続縄文時代と同じく、イヌを屠殺した後に毛皮が剥がれ、その後、体が各部位に分割されたことがうかがわれる。浜中 2 遺跡では、上腕骨に切痕を留める資料が多く確認されており（図 34）、体が分割された際に付けられた解体痕である可能性が考えられる。後述するように、オホーツク文化期には上腕骨を含めた前肢を特異に扱う事例が認められるため、それらとの関連を考慮する必要がある。なお、イヌでは、四肢骨が破砕した例は多くないため、骨髄の利用はそれほど積極的になされていなかったようである。また、頭蓋骨が穿孔された例は表 16、17 や図 35 に示した



表16 イヌの遺存体に観察された傷(3) オホーツク文化期

遺跡名	遺物番号 出土区・層	部位	傷の内容	推定死亡年齢*	備考	図番号
浜中2(1990~1992)	I-3, 12	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	亜成獣(生後6ヶ月)		
	I-5, 12	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	成獣		
	I-1, 5	頭蓋骨	前頭骨(左)に打撲痕?	成獣		図33-1
	I-2, 7~8	頭蓋骨	口吻部が切断	成獣		2
	I-2, 7~8	頭蓋骨	前頭骨(左)に孔	成獣		図35-12
	A-6, 5	上腕骨(左)	中間部・下部に傷	成獣		図34-7
	B-3-a, 2	上腕骨(左)	下半部に多数の傷	成獣		8
	B-3-b, 2	上腕骨(右)	下部に傷	成獣		9
	B-3-b, 3	上腕骨(右)	上半部に傷	成獣		
	B-4-b, 2	上腕骨(左)	下部に多数の傷	成獣		10
	B-6-a, 8・9	上腕骨(右)	中間部・下部に傷	成獣		
	B-3-b, 2	尺骨(右)	上部に傷	成獣		
	(1994~1997)	1325	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	幼獣(生後3ヶ月)	
6126		下顎骨(右)	第4前臼歯付近で切断?	成獣		
8539		下顎骨(左)	下顎枝の切断?	成獣		
香深井1	7060	頭蓋骨 下顎骨(左) 下顎骨(右)	鼻骨(左)に傷 骨体部(頰側)に傷? 骨体部(頰側)に傷?	成獣 成獣 成獣	同一個体	
	2514	頭蓋骨	前頭骨(左)に傷	成獣		
	1453	頭蓋骨	鼻骨(右)に傷?	成獣		
	2890	頭蓋骨	上顎骨(右)に傷?	成獣		
	15662	頭蓋骨	上顎骨(右)に傷	成獣		
	8095	頭蓋骨	上顎骨(左)に傷?	成獣		
	7089	頭蓋骨	前頭骨(左右)に傷	成獣もしくは亜成獣		
	5938	上顎骨	上顎骨(右)に傷?	成獣		
	15332	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	成獣		
	3652	下顎骨(左) 下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷? 骨体部(頰側)に傷?	成獣 成獣	同一個体	
	916	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	成獣		
	5906	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷?	成獣		
	8006	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷?	成獣		
	11418	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷?	成獣		
	18455	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷?	成獣		
	1688	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	成獣もしくは亜成獣		
5951	上腕骨(右)	下部に傷	成獣			
オンコロマナイ	A-3白砂上	上顎・下顎・歯牙	「破損が著しく、人為的な損傷を 思わせる」(大場・大井編1973: 203頁)	成獣		
	A-3白砂上	下顎骨	「骨体を縦裂きにした」(大場・ 大井編1973: 203頁)	成獣		
ホロベツ砂丘	M-12 841	上腕骨(左)	中間部・下部に傷	成獣		11
	M-17 378	脛骨(左)	中間部に傷	成獣		
柴浦第二	4号堅穴	上腕骨	下端に「切り裂かれたらしい痕 跡」(東京大学文学部1972: 510 頁)			
弁天島西	貝層	第5頸椎	「切りキズが多数」(北地文化研 究会1979: 53頁)	成獣		
	貝層	脛骨	「多くの切りキズ」(北地文化研 究会1979: 53頁)	成獣		
弁天島	ピット中	頭蓋骨	頭頂部(左)に孔?	成獣		
	P7	頭蓋骨	上顎骨(右)に傷	成獣		
		頭蓋骨×2	後頭部に「打撃による陥没骨折」 (西本編2003: 65頁)が認められ たものが2体あり			
トーサムボロ			多数の資料の「骨面には刃物の痕 跡」(北構・須見1953: 36頁)			

表17 イヌの遺存体に観察された傷(4) オホーツク文化期

遺跡名	遺物番号 出土区・層	部位	傷の内容	推定死亡年齢*	備考	図番号	
鈴谷	63	頭蓋骨	鼻骨に傷	成獣			
	1	頭蓋骨	上顎骨に傷	成獣			
	2	頭蓋骨	上顎骨に傷	成獣			
	6	頭蓋骨	上顎骨(左)に傷	成獣		図33- 3	
	12	頭蓋骨	上顎骨(左)に傷	成獣			
	14	頭蓋骨	上顎骨に傷	成獣			
	29	頭蓋骨	上顎骨に傷	成獣			
	54	頭蓋骨	上顎骨(左)に傷	成獣			
	74	頭蓋骨	上顎骨に傷	成獣			
	75	頭蓋骨	上顎骨(右)に傷	成獣			
東多来加	100	頭蓋骨	上顎骨(右)に傷	成獣		4	
	98	頭蓋骨	頭頂骨(右)に孔?	成獣			
	(斎藤報告)	頭蓋骨	後頭部に「金属質刀痕数条」(斎藤1938: 91頁)	成獣			
プロムイスロヴォエ2	(直良報告)	頭蓋骨	骨体部(頰側)に傷	成獣		図19	
	2	頭蓋骨	頭頂骨(左)に孔	成獣		図35-13	
	4-A3	上顎骨	上顎骨(右)に傷?	成獣			
	4-A3	下顎骨(左)	骨体部(頰側)に傷	成獣			
	6-A3	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	成獣		図33- 5	
	10737-10799	下顎骨(右)	骨体部(頰側)に傷	幼獣(生後3ヶ月)			
	4-A5	上腕骨(左)	下部に傷	成獣			
	12187-12358	上腕骨(左)	下部に傷	亜成獣			
	-	大腿骨(右)	上部に傷	亜成獣			
	2420	腰椎	下方に傷	成獣			
	2673	腰椎	下方に傷	成獣		6	
	ザーパドナヤ1	-	尺骨(左)	中間部・下部に傷	成獣		

\*上顎骨、下顎骨は歯牙の萌出・交換状況に基づいて推定を行い、その他の部位では関節の骨化状況で推定している。両者の年齢区分は一致しない。

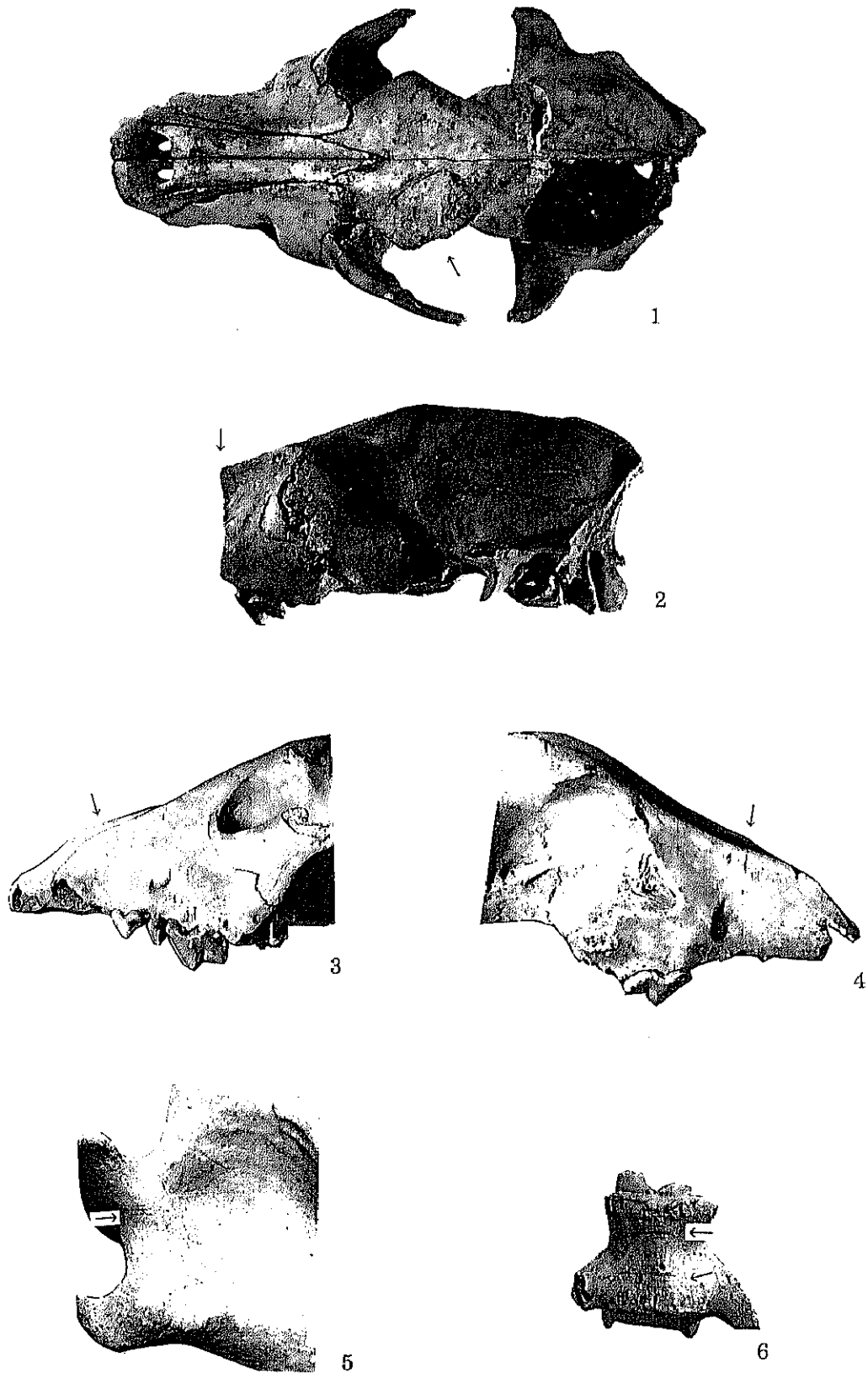


図 33 イヌの遺存体に観察された傷(5) オホーツク文化期  
 1~4:頭蓋骨 5:下顎骨 6:腰椎 (1~4:縮尺 1/2、6: 7/10、5:不明)

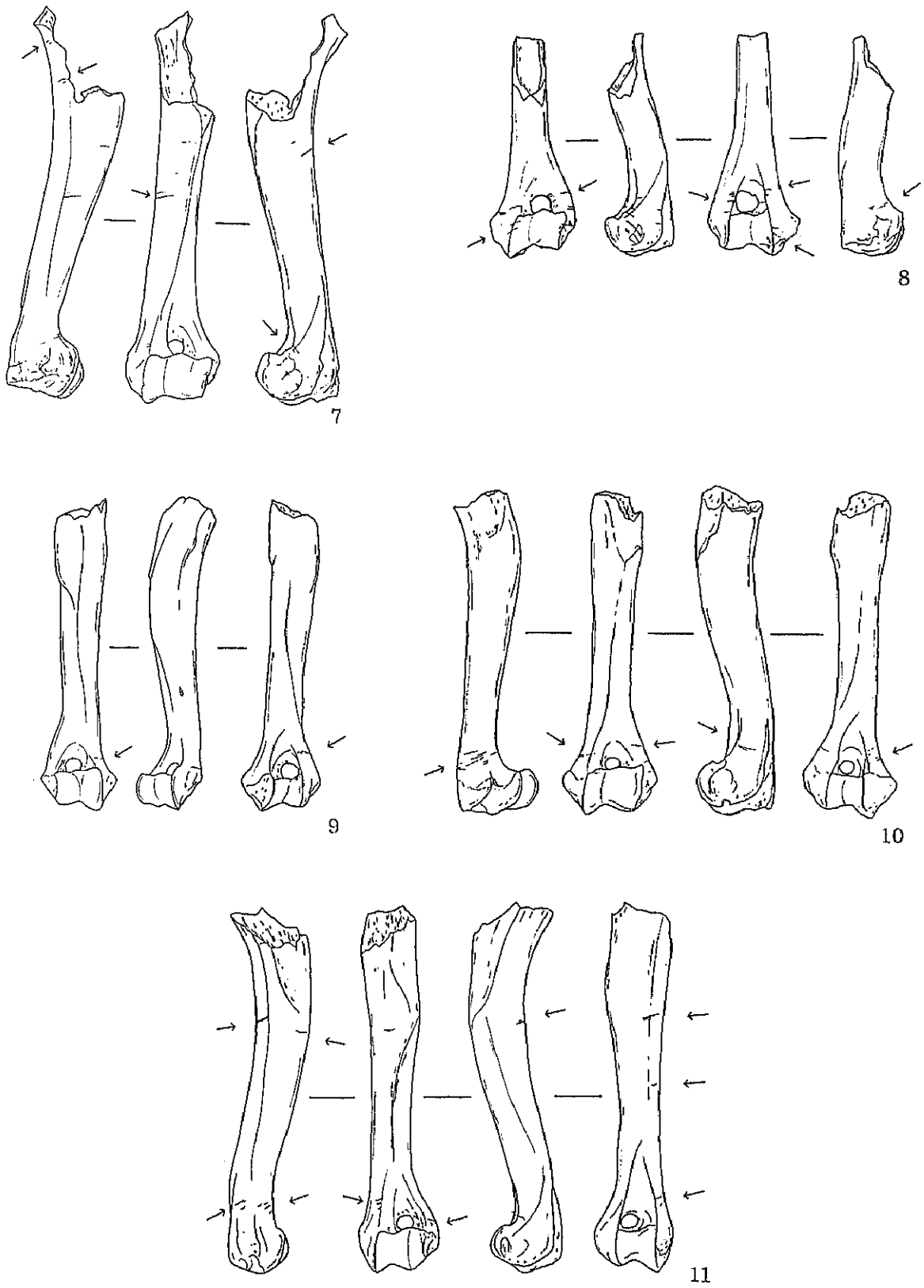


図 34 イヌの遺存体に観察された傷(6) オホーツク文化期  
7~11:上腕骨 (縮尺 1/2)

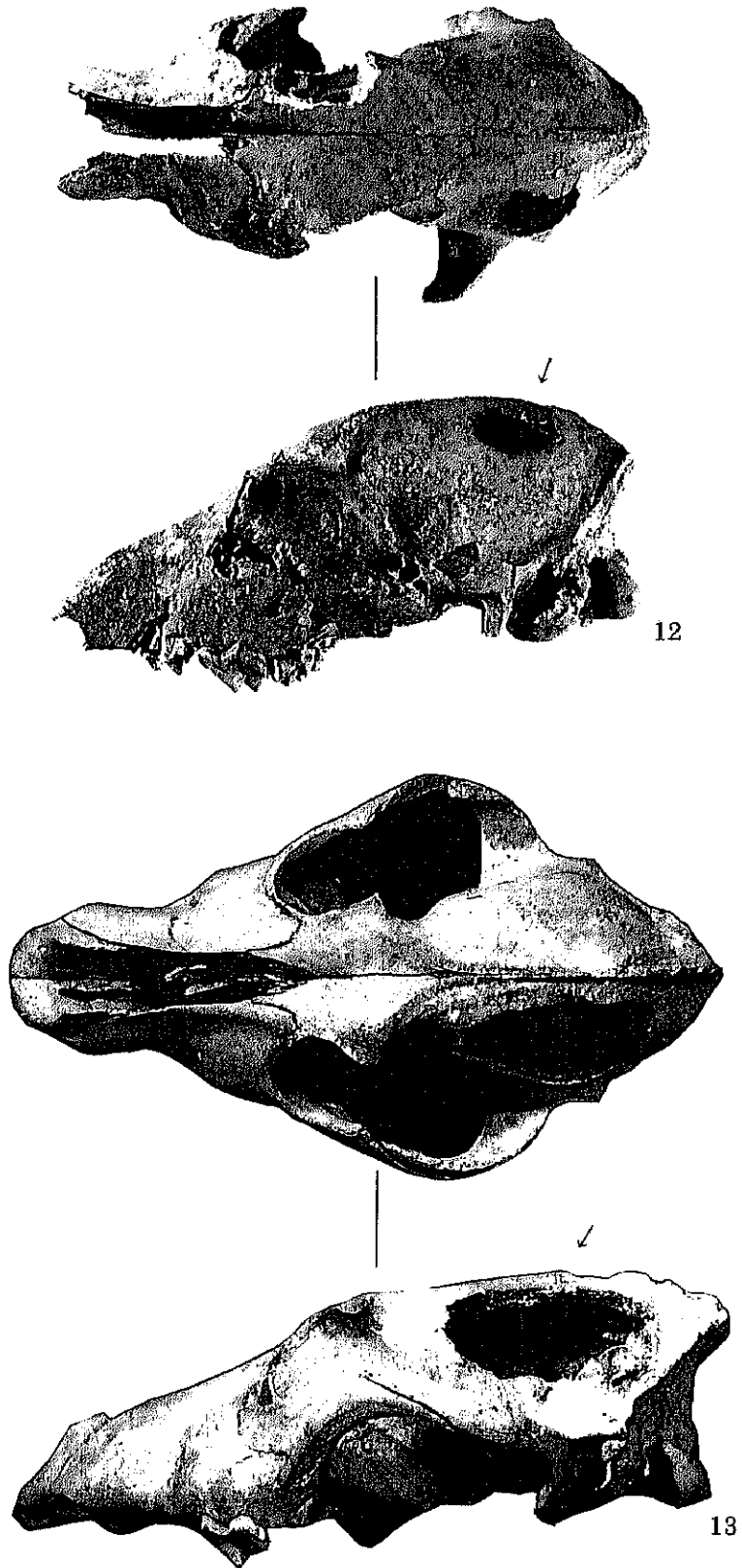


図 35 イヌの遺存体に観察された傷(7) オホーツク文化期  
12,13:頭蓋骨 (縮尺 1/2)

ように、数例確認されているが、それほど多いわけではないため、基本的には脳の利用も行われなかったものとみられる。

縄文時代からオホーツク文化期にかけて継続して行われたイヌの利用目的は、主として肉や毛皮の採取にあり、若い個体に偏る年齢構成は、生前にイヌが使役用としての役割を担っていなかったことを示唆する。このように、イヌは、実用的な用途のもとでその死後の体が利用されていたことが明らかであるが、オホーツク文化期中期の刻文期や江ノ浦期以降になると、イヌに非実用的な価値が付加されたことを想起させる特異な出土事例や遺物が見出されるようになる。これらについては、一部重複する事例もあるが、以下のよう整理できる。

#### (1)人間の埋葬に伴って犬骨の一部が出土する事例

ウトロ神社山：イヌの前肢や手足先の骨が墓の直上より出土（副葬？）〈刻文期〉

船泊砂丘第二：イヌの頭部が10号墓に埋葬された女性人骨の頭部脇で出土（副葬？）〈沈線文期？〉

#### (2)動物儀礼に伴って犬骨の一部が出土する事例

##### a クジラ祭りに伴って出土する事例

香深井1：クジラ祭りの遺構とされる石積み遺構よりイヌの頭蓋骨30点が出土し、同遺構の基底部から前肢骨を欠いた2個体分のイヌが出土（供献？）〈刻文期～沈線文期〉

##### b 堅穴内に設けられた動物儀礼の痕跡である「骨塚」に伴って出土する事例

栄浦第二、常呂川河口、トコロチャシ跡、モヨロ、ニツ岩：

住居内に設けられたヒグマを主体とする骨塚から少量のイヌが出土〈貼付浮文期〉

#### (3)頭蓋骨に穿孔を施される割合が他の獣類に比べて少ない

#### (4)陰茎骨の出土がほとんど認められない

#### (5)イヌの頭部がピットから出土する事例

香深井1〈刻文期〉、弁天島(未公表)〈刻文期？〉

#### (6)イヌの前肢に関連した事例

##### a 前肢骨が出土する事例

ウトロ神社山：イヌの前肢や手足先の骨が7号墓の直上より出土（副葬？）〈刻文期〉

##### b 前肢骨以外のほぼ全身骨がまとまって出土する事例

浜中2：前肢骨を欠いた2個体分のイヌが出土〈刻文期〉

香深井1：石積み遺構より前肢骨を欠いた2個体分のイヌが出土〈刻文期～沈線文期〉

##### c 装飾上腕骨

香深井1、種屯内：幾何学的な線刻が施されたイヌの上腕骨が出土〈刻文期〉

ノーバヤブローチノエ2：海上猟の様子が線刻されたイヌの上腕骨が出土〈時期不明〉

(7)埋葬犬を中心として一連の儀礼が執り行われたとみられる事例

プロムイスロヴォエ 2：副葬品を伴う埋葬犬 1 例とその周囲から火を焚いた痕跡や十数個体分のイヌの頭部が認められた（東多来加期）

このうち、(1)や(2)の事例では、埋葬や動物儀礼の主たる対象である人間やクジラ、ヒグマに対し、イヌの位置づけは客体的なものにとどまっている。特に、(2)・b に挙げた骨塚において、イヌの出土量は他の獣類に比べて少なく、骨塚に含まれない場合も多いことから、基本的には、イヌはこのような動物儀礼の中では、対象とみなされていなかったか、もしくはみなされることが稀であったことが分かる。

一方、(3)～(7)の事例については、イヌそのものに対して特別な価値を置いていた証左とみなせる。このうち、(6)・b の事例は、前肢のみが利用された後、遺棄された資料である可能性もある。ただし、肩部と並んで肉量の多い腿部を利用しなかった理由が説明し難いことや、これまでに 2 遺跡から 4 例の出土例が認められていること、香深井 1 遺跡でクジラ祭りの遺構とされる石積み遺構の基底部より出土していること、さらに、同遺跡で、出土層位は異なるが、前肢骨の一部をなす上腕骨に装飾を施した製品が合わせて出土していることなどを考え合わせれば、これを単なる食料残渣とみなすことはできない。よって、(6)の事例からは、中期（刻文期、江ノ浦期）に至り、イヌの前肢に何らかの意味を認めたことをうかがうことができよう。(7)の事例は、イヌが食料資源などとして利用されずに埋葬されていることや、副葬品を伴うこと、周囲に火を焚いた痕跡や多数のイヌの頭部が認められることから、非常に手の込んだ一連の儀礼の痕跡であるとみなすことができる（内山 2000）。埋葬されたイヌは、第 2 節ですでに述べたとおり、指先に骨増殖を起こしていたために歩行にも困難さが伴ったとみられ、また、比較的若い雄の成獣個体であったことから、生前に使役用としての役割を担っていたとは考えられない。そのため、このイヌが埋葬対象として選択された理由や儀礼の目的が何であったのかは不明だが、いずれにせよ、イヌが中心的な役割を担った動物儀礼の痕跡であることは確かといえよう。このようなイヌを中心とする儀礼は、オホーツク文化では初見であり、同文化でこれまでに知られてきたヒグマを頂点とする動物儀礼（天野 1975）とは、大きく趣を異にしている。前述したように、骨塚にイヌが伴うことは稀であるため、これまで動物儀礼にイヌはあまり関与せず、同文化の動物観の中でも下位に位置づけられるものとみられてきた（天野 1975）。しかし、中期以降に新たに見出されたイヌの特異な出土事例からも明らかなように、中期に至ってイヌに対する当時の人々の観念に変化が生じたとみなすことができ、後・末期の東多来加期に属する埋葬犬を中心とする動物儀礼の痕跡は、その動きを一層明確に示したものと位置づけられよう。

(3) 装飾上腕骨や特異な出土事例に見る周辺文化との関わり

前述したように、北海道やサハリンでは、オホーツク文化期の中期（刻文期、江ノ浦期）

以降に、イヌに非実用的価値が付加されたことを示す装飾上腕骨や特異な出土事例が確認されるようになる。

このうち、装飾上腕骨は、サハリン南部と道北部の礼文島、利尻島から計 5 点が出土している (図 21 - 1~5、図 36)。サハリンの資料については詳細な所属時期が不明だが、それ以外はいずれも同文化期中期に属する資料である。周辺文化では、これに類似した資料が、オホーツク海の北西岸に位置するウイカ遺跡でも得られている (Лебединцев1990) (註 13) (図 36)。ウイカ遺跡はロシア極東地域における初期鉄器時代に編年づけられており、出土土器には刻文やスタンプ文というオホーツク式土器と共通する要素が認められることから、両文化は時間的に併行するものとみられている。菊池俊彦氏 (1993) は、ウイカ遺跡と礼文町香深井 1 遺跡 (大場・大井編 1976) から出土したイヌの装飾上腕骨の類似性に着目し、両文化でイヌの骨に装飾を施すという伝統が共通することを指摘している。しかし、イヌとして報告されたウイカ遺跡の装飾上腕骨は、大きさからして明らかにオオカミの範疇に入るため (註 14)、同じイヌ科動物とはいえ、人間にとっては対極的な位置づけにある動物の上腕骨に対して、類似した装飾が施されていた点は興味深い。ただし、この資料については、幼獣段階から飼養されたオオカミや、オオカミと交雑した個体の上腕骨を素材としている可能性もある。なお、ウイカ遺跡では、図示した資料の他にも線刻された上腕骨 1 点が出土しているとされる (Лебединцев1990)。ともに住居址からの出土資料である。

香深井 1 遺跡から出土した装飾上腕骨に関しては、オホーツク文化の展開に影響を与えたと目される大陸の靺鞨文化やそれに後続する女真文化の遺跡から出土するウマの装飾指 (趾)骨 (註 15) (図 36) との関連を指摘した榎本哲氏 (1986) の論考がある。それによれば、靺鞨文化にみられる動物飼養や飼養動物に対する特異な精神観は、在地の農耕文化と南シベリヤの牧畜文化に系譜が求められるものであり、それがオホーツク文化圏の一部に影響を及ぼした結果、同文化においてイノシシ類の飼養やイヌの装飾上腕骨が出現するに至ったのだという。動物飼養やイヌに対する特異な行為の起源が大陸側に求められるとする同氏の説は参照すべき点が多いが、同氏も認めているように、両文化の動物飼養と動物儀礼との間には差異があるのも事実である。両文化に共通するとされる装飾肢骨についても、類似点は、①飼養動物の肢骨を素材としている点と、②線刻で装飾が施されている点に限られる (表 18)。このうち、①に関しては、オホーツク文化ではイヌ、靺鞨文化ではウマというふうに対象となる動物種が異なっており、ともに飼養動物であるとはいえ、前者が主に肉・毛皮採取用であるのに対し、後者では使役用 (Деревянко2000) とみられることから、文化内での位置づけにも差異のあったことは想像に難くない。さらに、装飾が施される部位も、前者の上腕骨に対して、後者では指 (趾)骨 (基節骨) が選択されており、その形態的な差異は大きい。②についても、装飾肢骨の多くで認められている幾何学的な模様は互いに類似しているようにも見えるが、これに類する模様は、オホーツク文化期のより古い段階から見られる鳥骨製の針入れなどにも認めることができる。加えて、ノーバヤ



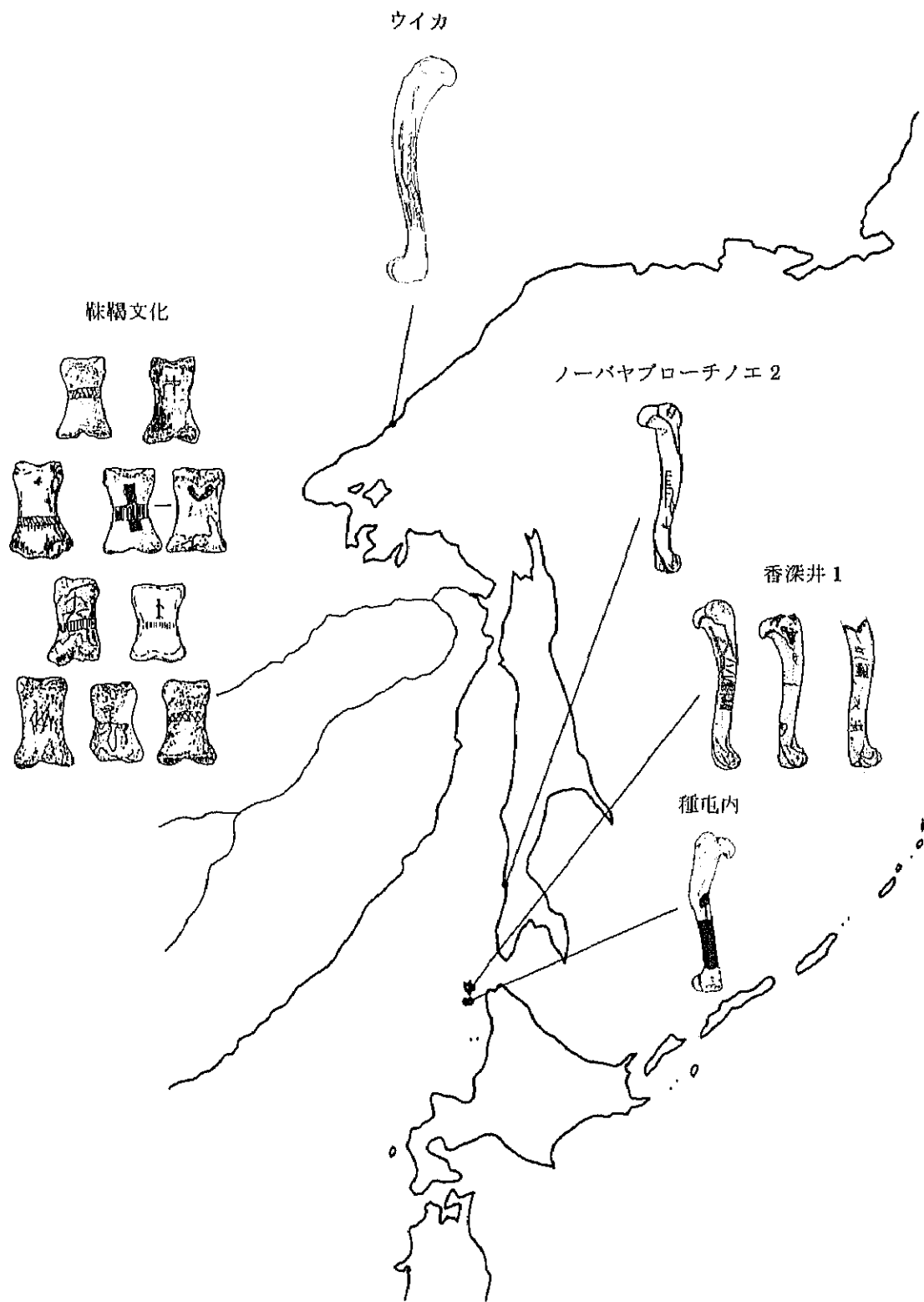


図 36 オホーツク文化とその周辺文化の装飾肢骨 (縮尺 1/6)

表18 オホーツク文化とその周辺文化における装飾肢骨

	オホーツク文化			初期鉄器時代	靺鞨文化
	種屯内	香深井1	ノーバヤ ブローチノエ2	ウイカ	
動物種	イヌ		イヌ科	オオカミ	ウマ
部位	上腕骨				基節骨
出土点数	1	3	1	2	多数
線刻の種類	V字状の刻み	幾何学文	海上狼の様子	幾何学文	幾何学文 絵画的な模様も含む
出土地点	包含層		?	住居	墓・住居

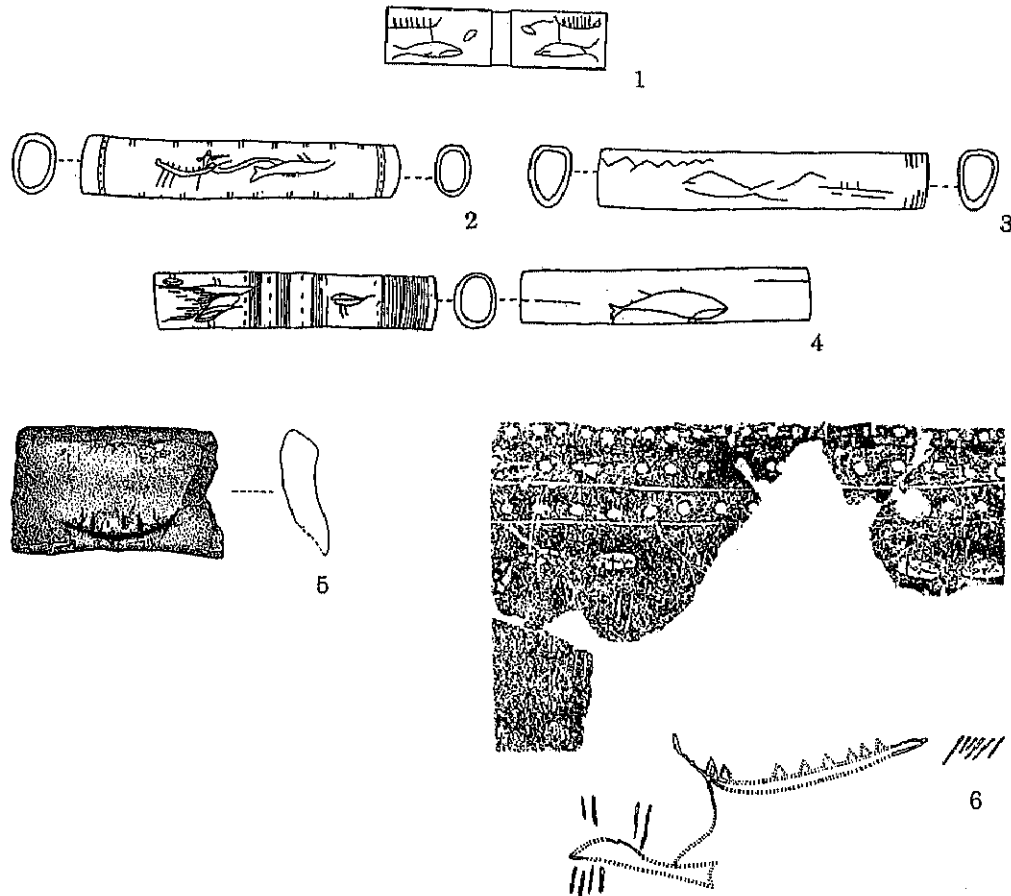


図 37 海上狼の様子を表現した線刻 (オホーツク文化期)

- 1: 鈴谷貝塚 (八幡 1943) 2,3: 弁天島貝塚 (八幡 1943) 4: トーサンポロ貝塚 (八幡 1943)  
 5: 弁天島遺跡 (北構 2000) 6: 香深井1遺跡 (大井 1984) 1~4: 針入れ 5,6: 土器 (縮尺 6: 1/3 他 1/2)

ブローチノエ 2 遺跡資料に線刻された海上狐の様子も針入れなどによく表現される図柄であり (図 37)、高度に海洋適応を遂げた文化として知られるオホーツク文化の伝統の中で出現したものとみなせる。そのため、類似点とされる②についても、靺鞨文化からの直接的な影響を示すものとは断定できない。

さらに、両文化の装飾肢骨における出土地点の差異は顕著であり、靺鞨文化では墓址や住居址から出土しているのに対して、オホーツク文化期に属する資料の中に遺構に伴った例はこれまでのところ認められていない。出土地点の違いは、その遺物の製作された意味や果たした役割の差異を反映している可能性が高く、両文化の装飾肢骨を比較するにあたり、その違いの意味するところは大きい。

つづいて、装飾肢骨の所属時期について検討を加えることとする。ウマの装飾指(趾)骨が出土しているのは、靺鞨文化に属するトロイツコエ村墓址 (ヂェレヴァンコ 1975、Деревянко1977) や、オシノヴォエ湖岸遺跡 (Деревянко1975)、チェレムホヴォ遺跡 (Деревянко1975) などであり、近年にもアムール河中流域で新たな資料が追加されている (Шеломихин2001)。靺鞨文化は、前後関係にあるナイフェリト土器群の段階とトロイツコエ土器群の段階とに大きく分けられるが (Деревянко1975、Дьякова1984、臼杵 2004)、ウマの装飾指(趾)骨のうち、所属時期の明確なものは、いずれも後半期にあたるトロイツコエ土器群の段階に属している。先行するナイフェリト土器群の段階でも、ナイフェリト墓址の 2 号埋葬址底面からウマの指(趾)骨 3 点の出土が報告されているが (Деревянко et al.1999)、装飾の有無については記載されていない。これに装飾が施されていたならば、おそらく特記されたであろうし、さらにここで基節骨、中節骨が結合し、末節骨も合わせて出土しているとの記載からすれば、軟体部がまだ残り、指が一連となっていた状態で埋められたものとみられ、その点からも装飾が施されていなかった可能性が高いといえる。このナイフェリト土器群が、オホーツク文化の江ノ浦 B 式土器や刻文土器と類似することは古くから指摘されており (加藤 1975、菊池 1976、前田 1976)、近年の編年的整理からもこの時間的併行関係の妥当性が確認されている (臼杵 2004、熊木 2004)。オホーツク文化のイヌの装飾上腕骨は、刻文土器が北海道に展開する時期に属する資料であり、トロイツコエ土器群に伴うウマの装飾指(趾)骨よりも古く位置づけられる (表 1)。そのため、既知の資料で見るとは、靺鞨文化のウマの装飾指(趾)骨の影響によって、オホーツク文化にイヌの装飾上腕骨が出現したとする榎本氏の見解は成り立ち得ないことになる。

前述したように、ナイフェリト土器群の段階にもウマの指(趾)骨は得られている。そのため、今後、この段階やそれ以前に属するウマの装飾指(趾)骨が発見される可能性は十分にある。しかし、両者のギャップは所属時期の問題にとどまらず、装飾される対象となった飼養動物の種類や文化内での位置づけ、素材の形態的特徴や装飾の内容、その遺物が製作された意味や用途など、多岐に及ぶことが明らかである。そのため、両者の間には直接的な影響関係はなく、イヌの上腕骨に施された線刻は、鳥骨製の針入れなどに描かれた線刻と同じく、オホーツク文化の伝統の中で出現したものと理解することが妥当といえよう。た

だし、装飾上腕骨を含め、イヌについての特異な出土事例が見出されるオホーツク文化期中期は、刻文土器の出現や大陸系遺物（菊池 1976、山田他 1995、高島 1998）の増加からも明らかのように、大陸からの影響が深まる時期にあたっている。大陸では靺鞨文化やそれに先行するポリツェ文化、ウリル文化において、飼養動物に対する特異な精神観が連続と続いていたことが知られており（Деревянко1973、1976、菊池 1976、加藤 1980、榎本 1986 など）、これが、オホーツク文化のイヌ利用に変化をもたらした要因の一つとなった可能性は否定できない。大陸の諸文化では、墓壙や住居址から飼養動物が出土する例が数多く報告されている。そのため、オホーツク文化におけるイヌの特異な出土事例のうち、前肢や手足先の骨が墓の直上より出土したウトロ神社山例（刻文期）や、頭部が埋葬人骨の頭部脇で出土した船泊砂丘第二例（沈線文期？）については、大陸からの影響を考慮する必要がある（註 16）。しかし、靺鞨文化の事例とこれらとの間にある空間的ギャップを埋める資料はこれまでのところ得られていないため、ここではその可能性を指摘するにとどめる。さらに、この中期という時期は、後章で論じるように、大陸由来のイノシシ類が出土量を増す時期にあたっている。そのため、イノシシ類の導入によるオホーツク文化内の生業体系の改変がイヌ利用に影響を及ぼした可能性も十分に考えられる。なお、飼養動物の中で特異に取り扱われる対象は、アムール河下流域では主にブタやウマ、ヤギであり（大貫 1998、臼杵 2004 など）、イヌはその範疇に含まれないことが多い（註 17）。そのため、仮に大陸での飼養動物に対する特異な精神観がオホーツク文化へ影響を及ぼしたことを認めたとしても、飼養動物の中で特別に扱う種としてイヌを選択したことやその扱い方の詳細については、オホーツク文化独自の選択が働いたものとみなすことができよう。

#### 註

- (1)天都山貝塚事例については、畠山三郎太氏（1967）により縄文早期に属する資料と紹介されているが、イヌの遺存体が発見されたトレンチ内から出土した朱円式土器は、現在、縄文前期に編年づけられている。
- (2)バリシャヤ・ブフタ土器群については、新石器時代後半以降から初期鉄器時代の紀元前 2 千年期後半から 1 千年紀前半にかけての編年位置が推定されており（シェフコムド 2003 [2002]）、ザーパトナヤ遺跡群との隔たりが大きい。両土器群の編年上の位置づけは、北海道とサハリン、アムール河下流域の相互関係を捉える上での重要な課題である。
- (3)サハリン中部のザーパトナヤ 1 遺跡では、サハリン南部に主として分布する続縄文文化（アニワ文化期）の土器が、黒曜石製の石鏃やスクレーパーなどとともに出土している（Федорчук1995）。この土器は、口縁部が内反する器形から、プレドリェフリャンカ段階に先行するユージナヤⅡ段階に編年づけられるものである。
- (4)筆者分析による。
- (5)筆者分析による。

- (6)山浦清先生（立教大学）からのご教示による。
- (7)モヨロ貝塚から、イヌの頭蓋骨が 300 個ほども収集されているとの記載もみられるが（児玉 1950）、所属時期は定かでない。
- (8)遺跡名と字名のどちらを指しているのかは不明である。
- (9)ウスチ・トゥナイチャ 1 遺跡、アジョールスク 1 遺跡、プロムィスロヴォエ遺跡のいずれかから出土した資料である。
- (10)鈴谷貝塚（スヤ遺跡）は多層遺跡であり、鈴谷期だけでなく、それ以降の資料も確認されている。そのため、ここで出土した犬骨が全て鈴谷期に属するものとは断定できない。ただし、前述したように、同遺跡では、鈴谷式土器に伴って「シベリア犬」（伊東 1942 : 42 頁）が認められたとの報告例があるため、第 3 型の資料の中には、鈴谷期に属する資料が含まれているものとみられる。
- (11)前述したように、直良氏（1957）は、自らの分析資料の中に、高橋氏（1940a～d）による第 1 型に類する資料は見出せなかったと述べている。そのため、直良氏の B 型と高橋氏の第 1 型を同類のものとするこの記載には矛盾が認められる。
- (12)西日本まで含めれば、長崎県壱岐島に所在する原の辻遺跡（長崎県教育委員会 1995）で、オホーツク文化期のイヌに類する形質的特徴を具えた下顎骨の報告例を認めることができる。ただし、ここで出土したイヌの形質は概して縄文系とされる。
- (13)ウイカ遺跡の装飾上腕骨 2 点には、切断や削りの痕跡が認められるとされる（Лебединцев1990）。しかし、図示された資料で欠けているのは近位部のごく一部分であり、人為的に切断されたものかどうか判断できない。
- (14)後に、菊池氏が自らの論考の中で、西本豊弘氏からの教示として、オオカミである可能性を述べている（菊池 1995）。
- (15)基節骨、中節骨、末節骨からなる指(趾)骨の中で、基節骨（図 4、36）が用いられている。
- (16)ウトロ神社山遺跡でイヌが副葬された可能性のある 7 号墓には、「二型壺型土器」（大場 1956 : 198 頁）が伴っている。この土器は、主としてサハリンと道東部に分布しており、その型式学的特徴から靺鞨文化の土器との密接な関係性が指摘されている（前田 1976）。また、船泊砂丘第二遺跡では、イヌが出土した墓壙とは別に、靺鞨文化に特徴的とされる木槨墓（菊池 1976）が 1 例認められている。
- (17)大陸側で、イヌに精神的価値を置く例は、内陸に位置する匈奴や鮮卑、烏桓において認められている。匈奴や鮮卑では、ウマやウシ、ヒツジなどとともに、イヌの頭や手足を墓に入れる風習があり（内田訳注 1971、河内訳注 1971、鳥 1996〔1990〕）、また烏桓では、葬式に際してイヌを用いた儀礼が行われたという（河内訳注 1971）。ただし、これらとオホーツク文化との間には、時間的・空間的ギャップが大きく、両者の間に直接的な関連性を認めることはできない。

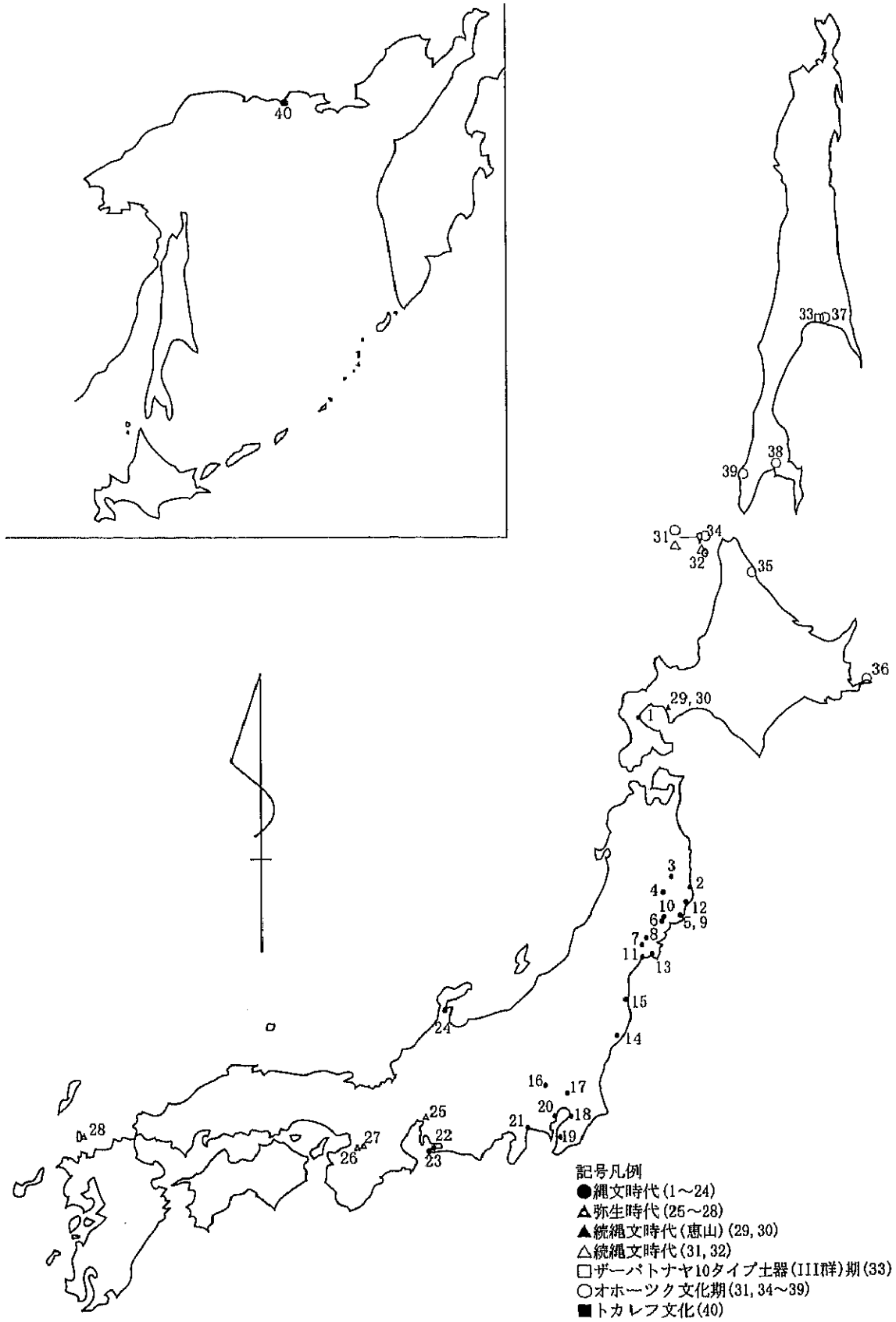


図 26 頭蓋骨の計測値を用いた遺跡

表9 頭蓋骨の計測値(1)

遺跡名	時代	遺物番号	タイプ	最大頭蓋長	稜口蓋最大幅	出典	図番号
コタン温泉(北海道)	縄文後期	1		165.6		西本・新美1992	図26-1
中沢浜(岩手)	縄文中期			158.8		茂原1986	2
同上	縄文中期	1849		155.3		筆者計測	
門前(岩手)	縄文中期～後期				51.0	茂原1986	3
同上	縄文後期			153.8	54.8	茂原・小野寺1984	
同上	縄文後期～晩期			145±	51±	茂原・小野寺1984	
貝島(岩手)	縄文後期			174.1	59.4	茂原・小野寺1984	4
田柄(宮城)	縄文晩期前半	2		183.4	62.3	茂原・小野寺1986	5
同上	縄文晩期前半	3		160.8	57.4	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	6		165.4	57.2	茂原・小野寺1986	
同上	縄文晩期前半	7		163.3	58.8	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	8		154.5	50.9	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	9		148.3	54.0	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	10		162.5		茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	11			57.6	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	12		145.4	52.2	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	13			56.6	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期後半	14		159.8	57.4	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期前半	16		171.3	63.4	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期前半	17		161.1	53.6	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期前半	18		157.6	54.5	茂原・小野寺1986	
同上	縄文後期前半	21		163.4	54.0±	茂原・小野寺1986	
青島(宮城)	縄文早期～後期			164±	59.7	茂原・小野寺1984	6
響(宮城)	縄文中期～後期				56.9	茂原1986	7
南境(宮城)	縄文後期～晩期			168.3	56.5	茂原1986	8
同上	縄文			166.8	57.5	茂原・小野寺1984	
境(宮城)	縄文			168.5	56.2	茂原・小野寺1984	9
富崎(宮城)	縄文			166.0		茂原・小野寺1984	10
宇賀崎(宮城)	縄文前期中葉			182	58±	茂原・小野寺1984	11
前浜(宮城)	縄文晩期			171.8	59.0	茂原・小野寺1984	12
沼津(宮城)	縄文後期～晩期	1		180.3	59.6	茂原1986	13
薄磯(福島)	縄文晩期			177±	54.0	芹沢・馬場・芹沢1988	14
三貫地(福島)	縄文後期	1		158.5±	56.0	小宮1995	15
同上	縄文後期	2		160.8±	55.2	小宮1995	
同上	縄文後期			143	55	茂原・小野寺1984	
花積(埼玉)	縄文前期	4		141	46.5	斎藤1940	16
我孫子(千葉)	縄文後期	46		146.5	49	斎藤1940	17
主理台(千葉)	縄文後期			156.6	52.0	茂原・小野寺1984	18
大坪(千葉)	縄文中期			162.2	57.5	茂原・小野寺1984	19
西ノ谷(神奈川)	縄文前期	13		156±	45.5	斎藤1940・土岐1936	20
羽根尾(神奈川)	縄文前期	16973		165.5	55.9	樋泉他2003	21
同上	縄文前期	18105		173.6	59.4	樋泉他2003	
吉胡(愛知)	縄文晩期	1			51.0	茂原1986	22
同上	縄文晩期	3		155.9	53.8	茂原1986	
同上	縄文晩期			156.3	54.9	茂原・小野寺1986	
同上	縄文晩期			147.1	51.7	茂原・小野寺1986	
伊川津(愛知)	縄文晩期	1		146.2	52.3	西本(1995) 掲載資料を再計測	23
同上	縄文晩期	4		145.1	71.3	西本(1995) 掲載資料を再計測	
同上	縄文晩期	8		154.0	52.3	西本(1995) 掲載資料を再計測	
三引(石川)	縄文早期末～前期初頭	166		167	56.0	茂原他2004	24
1	縄文(50個体)			160.7	55.6		
朝日(愛知)	弥生	61AB-283		166.3	56.8	西本(1994) 掲載資料を再計測	25
同上	弥生	61AB-745		134.7	49.9	西本(1994) 掲載資料を再計測	
同上	弥生	61AB-850		168.3	57.6	西本(1994) 掲載資料を再計測	
同上	弥生	61AB-995		146.9	49.9	西本(1994) 掲載資料を再計測	
同上	弥生	61F-002		155.3		西本(1994) 掲載資料を再計測	
恩智(大阪)	弥生前期～後期	NE-7~8		145.80±	49.05	宮崎(1982)	26
亀井(大阪)	弥生中期	SD-03 1		175.0		宮崎(1982)	27
同上	弥生中期	SD-03 2		164.2		宮崎(1982)	
同上	弥生後期	SD-06 3		160.3		宮崎(1982)	
原の辻(長崎)	弥生中期～後期	S7-21 2号溝B5(黒色)		157.9	53.7	茂原・松井(1995)	28
同上	弥生中期～後期	S7-21 2号溝B5(白色)		159.3	57.1	茂原・松井(1995)	
2	弥生(11個体)			157.6	53.8		

計測値はmm単位で示した

表 10 頭蓋骨の計測値(2)

遺跡名	時代	遺物番号	タイプ	最大頭蓋長	硬口蓋最大幅	出典	図番号
3 有珠10	縄文前半(恵山)	G16-68		145.0	49.0	筆者計測	図26-29
4 南有珠6	縄文前半(恵山)	726		176.7	55.6	筆者計測	30
5 浜中2	縄文前半	5 20 1		174+	60.4	内山・松村1997	31
6 浜中2	縄文前半	301		168±	66.5±	内山・松村1997	
7 浜中2	縄文前半	8341		186.0	67.4±	西本・内山2000	
8 浜中2	縄文前半	1229		179.2	60.9	内山・松村1997	
9 浜中2	縄文前半	9287		162±	56.5	内山・松村1997	
10 浜中2	縄文前半	10533		175.5	61.6	内山・松村1997	
11 種屯内	縄文前半	69		142.6	58.0	筆者計測	32
12 種屯内	縄文前半	72		154.0	59.2	筆者計測	
13 種屯内	縄文前半	109		160.1	58.1	筆者計測	
14 種屯内	縄文前半	139A		171.8	56.1	筆者計測	
15 ザーバトナヤ10	「ザーバトナヤ10タイプ土器」期	11		189.0	64.6	筆者計測	33
16 ザーバトナヤ10	「ザーバトナヤ10タイプ土器」期	上部貝層2b		175.8	58.8	筆者計測	
17 ザーバトナヤ10	「ザーバトナヤ10タイプ土器」期	上部貝層3b		193.7	68.5	筆者計測	
浜中2	オホーツク(十和田)	17	A	181.0	64.6	筆者計測	31
浜中2	オホーツク(十和田)	19	A	161.1	63.4	筆者計測	
浜中2	オホーツク(十和田)	20	A	176.7	66.4	筆者計測	
浜中2	オホーツク(刻文)	1	A	179.0±	68.7	筆者計測	
浜中2	オホーツク(刻文)	2	A	173.6	62.6	筆者計測	
香深井1	オホーツク後期	2422	A	190.3	67.7	西本(1981) 掲載資料を再計測	34
香深井1	オホーツク中～後期	1976	A	188.7	63.7	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中～後期	2990	A小型	166.2	64.1	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中～後期	3091	A	186.7	68.7	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中～後期	3615	A小型	178.5	67.7	筆者計測	
香深井1	オホーツク中～後期	5023, 5025	A?	174.5±	66.7	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中～後期	5024	A?		66.9	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中～後期	6089-2	A	175.5±	65.2	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中～後期	7029	A	187.5±		西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中～後期	7048	A?	179.6		西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	5912	A?	194.0	69.6	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	5913	A	179.2±	69.3±	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	5955	A	196.6	66.4	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	5996	A	203.3	70.2±	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	1445	A?	166.0±	62.4±	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	5962	A	195.9	69.4	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	6918	A?		63.9	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	8095	A?		68.3	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	16170	A	168.2±	60.0	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	4636	A	198.5	66.2	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク中期	17479(16463)	A	175.0	66.1	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク前～中期	2890	A?	194.0	65.0	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク前～中期	18147	A	189.0	65.6	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク前～中期	19154	A	196.2	68.8	西本(1981) 掲載資料を再計測	
香深井1	オホーツク前期	17421	A	180.0±	65.5±	西本(1981) 掲載資料を再計測	
ホロボツ砂丘	オホーツク中期		A	187.3	65.9	筆者計測	35
弁天島	オホーツク中期以降	78-62	A	190+	67.0	筆者計測	36
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	P-2-94	A	181.4	60.0	筆者計測	37
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	P-2-94	A	179.9	63.3	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	2670	A	193.0	68.8	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	3049	A		66.4	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	11109	A	177.4	59.0	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	12173	A	176.7	67.5	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	12174	A	195.0	69.1	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	12176	A	171.6	61.6	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	12177	A		62.6	筆者計測	
ブロムスロヴォエ2	オホーツク後・末期	12178	A	164.8	60.3	筆者計測	
18	オホーツク大A型(42個体)			182.5	65.6		

計測値はmm単位で示した



表 11 頭蓋骨の計測値(3)

遺跡名	時代	遺物番号	タイプ	最大頭蓋長	硬口蓋最大幅	出典	図番号	
香深井I	オホーツク中～後期	2514	AB?	190±	68.4±	西本 (1981) 掲載資料を再計測	図26-34	
香深井I	オホーツク中～後期	3691	AB?	169.5	61.4	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中～後期	3652	AB?	187.5	64.7	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中～後期	3657	AB	173.3±	64.2	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中～後期	6958	AB	172.0	61.7	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中～後期	6090	AB	176.1		西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中～後期	7087	AB	156.7	61.0	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中期	8090	AB?		64.4±	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中期	16113	AB	188.0	63.1	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
弁天島	オホーツク中期以降	78-P7	AB	165+	60.8	筆者計測		
プロムイスロヴォエII	オホーツク後・末期	A10 No.6 埋葬	AB	186.1	64.0	内山2000		
プロムイスロヴォエII	オホーツク後・末期	P-2-94 No.332	AB	179.2	62.8	筆者計測		
プロムイスロヴォエII	オホーツク後・末期	P-2-94	AB	194.8	69.6	筆者計測		
19	オホーツク犬AB型(13個体)			178.2	63.8			
香深井I	オホーツク後期	1943	B	161.7	54.5	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中～後期	3946	B	166.4	57.1	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中期	5911	B?	174.8	59.0	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中期	3489	B?		61.7	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中期	15562	B	180.5	60.8	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク中期	12240	B?	174.5	62.3	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク前～中期	1453	B	170.8	58.1	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
香深井I	オホーツク前期	4419	B	171.9	62.6	西本 (1981) 掲載資料を再計測		
弁天島	オホーツク後期	95-23	B	155.3		筆者計測		
弁天島	オホーツク後期	96-45	B	173.5		筆者計測		
弁天島	オホーツク後期	96-46	B	161.0	62.0	筆者計測		
20	オホーツク犬B型(11個体)			169.0	60.2			
鈴谷	オホーツク	1		189.6	66.4	茂原1986		38
鈴谷	オホーツク	2		179.3	61.5	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	3		159.6	61.2	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	4		165.7	64.1	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	5		164.8	60.6	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	6		168.9	62.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	7		162.2	57.5	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	8		166.8	58.1	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	9		176.0	64.2	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	10		170±	61.6	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	11		162.5	60.9	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	12		184.2	65.0	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	13		194.3	64.6	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	14		180+	65.0	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	15		189.2		筆者計測		
鈴谷	オホーツク	16		186.4	67.4	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	17		183.7	63.1	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	18		175.4	62.5	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	19		183.7	66.6	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	20		189.0±	63.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	21		191.4	70.7	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	22		183.0±	64.8	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	23		189.7	68.5	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	24		171.8	62.0	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	25		172.9	60.0	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	26		166.2		筆者計測		
鈴谷	オホーツク	27		164.9	63.8	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	28		167.2	60.5	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	29		160.5±	58.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	30		176.9	64.3	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	31		173.4±		筆者計測		
鈴谷	オホーツク	32		176.5	60.0	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	33		176.8	62.5	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	34		167.4±	57.6	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	35		186.5±	65.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	36		161.1	59.2±	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	37		185.5	69.2	茂原1986		

計測値はmm単位で示した

表 12 頭蓋骨の計測値(4)

遺跡名	時代	遺物番号	タイプ	最大頭蓋長	硬口蓋最大幅	出典	図番号	
鈴谷	オホーツク	38		161.4	78.8	筆者計測	図26-38	
鈴谷	オホーツク	39		166.0	63.0	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	40		176.8±	68.8±	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	41		154.1	57.0±	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	42		157.5±	57.5	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	43		170.3	56.4	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	44			60±	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	45			60.1	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	46		163.4	61.8	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	47		176.4	64.4	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	48		163.7	58.4	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	49			65.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	50		172.1	60.3	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	51		171.3	64.5	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	52		177.7±	64±	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	53		189.0	63.9	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	54		166.7	63.5	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	55		170.9	67.4	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	56		180±	61.1	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	57		170.7	63.3	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	58		171.2	64.4	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	59		171.7	66.4	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	60		173.4	64.1	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	61			66.0	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	62		174.5±		筆者計測		
鈴谷	オホーツク	63		179.5±	62.9	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	64		179.1	65.2	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	65		174.5±	61.3	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	66		168.8	62.2	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	67		176.7	63.5	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	68		176.8	62.4	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	69		165.3	60.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	70		172.5±	65+	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	71		152.9±	56.3	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	72		185.4	68±	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	73		172.8	61.5±	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	74		189.0	66.4	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	75		186.0	66.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	76		164.8	62.2	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	77		172.0	58.4	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	79			62.6	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	80		174.0	62.1	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	81		167.2	60.7	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	85			59.1	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	89			64.3	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	90			72.0	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	91			72.0	茂原1986		
鈴谷	オホーツク	92			65.6	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	97			65.3	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	103			54.7	筆者計測		
鈴谷	オホーツク	110			51.3	筆者計測		
21	鈴谷貝塚(88個体)				173.6	63.1		
	吐鯨保	オホーツク?	12	1	167	57		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	9	1	169	61		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	11	1	170	60		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	10	1	163	63		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	T3	1	177	69		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	T4	1	175.5	66		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	T8	1	179	65		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	T9	1	177	61		筆者計測
	東多来加	オホーツク後・末期	T17	1	177	65		筆者計測
22	オホーツク犬第1型(9個体)				172.7	63.0		

計測値はmm単位で示した

表 13 頭蓋骨の計測値(5)

遺跡名	時代	遺物番号	タイプ	最大頭蓋長	硬口蓋最大幅	出典	図番号
北貝塚	オホーツク	25	2	179	63	筆者計測	図26-38
東多来加	オホーツク後・末期	T1	2	186	64	筆者計測	37
東多来加	オホーツク後・末期	T2	2	186		筆者計測	
東多来加	オホーツク後・末期	T5	2	180.5	70	筆者計測	
東多来加	オホーツク後・末期	T13	2	184	65	筆者計測	
23	オホーツク犬第2型(5個体)			183.1	65.5		
北貝塚	オホーツク	T25	3	207		筆者計測	
東多来加	オホーツク後・末期	T6	3	200	67	筆者計測	
東多来加	オホーツク後・末期	T7	3	201	65	筆者計測	
東多来加	オホーツク後・末期	T16	3	198	75	筆者計測	
東多来加	オホーツク後・末期	T24	3	193		筆者計測	
24	オホーツク犬第3型(5個体)			200	69		
25	スバファリエヴァ	トカレフ	218	168.4*	57.4	佐藤1996	40

計測値はmm単位で示した